

羽咋市獅子舞調査報告書

文化庁 文化遺産総合活用推進事業「はくい獅子舞等の総合的把握による地域活性化事業」

平成三十一年三月

はくい獅子舞保存活性化実行委員会



はじめに

トザイ
東西、トーザイ。

獅子舞のお囃子が聞こえると、心が躍ります。私たち実行委員会
は、祭礼と獅子舞を愛する集団です。その魅力を伝えようと、映像
インデックスを作ること始めたのが、平成二十七年のことです。あ
れから4年。市内の祭礼を回り、獅子舞調べを続けてきました。

市内各地の祭礼を見て確信したことは、獅子舞は、羽咋の人々にとつ
て欠かせないものだということです。地域の熱い情熱を受け継ぐ青
年団や子供たちの熱心な演舞と、それを楽しむ皆さんの笑顔が象徴
的でした。獅子舞は、それぞれに違いがありますが、その風景は、
どの地区も同じだと感じました。

しかし、少子化等の影響もあり、獅子舞が縮小傾向にある地域もあ
ります。私たちは、獅子舞が地域に愛される存在だからこそ、しっ
かりと調べ、記録を残し、未来の羽咋に残していきたいと考えてい
ます。

本書は、当実行委員会が、文化庁の補助を得て、平成二十七年度（
三〇年度に実施してきた獅子舞調査の成果を取りまとめたもので
す。これを通して、羽咋の獅子舞をより詳しく知ってほしいと思い

ます。そして、自分の地区と他地区の獅子舞を見比べ、「やっぱり
ウチの獅子舞が最高だな！」と自分の集落の魅力を再発見してほし
いと思います。それが地域活性化の材料になるのではないかと思っ
ていますし、各ザイショで愛される獅子舞だからこそ、それができ
ると思っています。

調査成果の取りまとめは、とても大変な作業でした。不十分な点
もあるかと思っています。その際には、また獅子舞の撮影にまいます
ので、教えてほしいと思います。

最後に、私たち実行委員会の事業に、絶大なご理解とご協力をい
ただいた市内各町会の皆さま、写真や映像を快くご提供いただいた
皆さま、市内外の獅子舞を愛する皆さまに厚くお礼申し上げます。
人気は、^{ニッキ}栄当、^{エートウ}エートウとありまして、ごあいさつとさせていた
できます。

平成三十一年三月

はくい獅子舞保存活性化実行委員会

一同



例言

一、本書は、石川県羽咋市で行われている獅子舞等を対象とした、文化庁の文化遺産総合活用推進事業「はくい獅子舞等の総合的把握による地域活性化事業」の報告書である。

二、本事業は、「はくい獅子舞保存活性化実行委員会」が、平成二七年度から平成三〇年度の四か年をかけて実施した事業のうち、調査研究事業を取りまとめたものである。事業の実施には、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業（平成二七～二八年度）」および「文化遺産総合活用推進事業（平成二九～三〇年度）」の事業費補助金を得て実施した。

三、本書の編集・執筆は、実行委員会メンバーにより行った。本文の執筆担当は次の通りである。

第一部・・・中野知幸（委員※羽咋市歴史民俗資料館学芸員）

第四部・・・諏訪雄士（委員※民間人）

四、平成二九年度事業において、一般財団法人神道文化会の「神道芸能普及費助成金」を得た。また、平成二九・三〇年度には、石川県神社庁羽咋支部から助成金を得た。ここに記して厚く御礼申し上げる。

五、本書の掲載写真は、当実行委員会が撮影したものである。ただし、現在、獅子舞を休止・中止しているため撮影が不可能なものについては、渋谷利雄氏（写真家、羽咋市文化財保護審議会委員）をはじめ、羽咋市歴史民俗資料館所蔵資料、市内各地の有志らから写真等の提供を得て掲載した。ここに記して感謝申し上げる。

目次

第一部 羽咋の獅子舞概説 一頁

第一章 事業の概要

第二章 総論

第三章 羽咋の獅子

第四章 資料論

第五章 演目分布論

第六章 多様性と地域性

第二部 羽咋の獅子舞インデックス 二九頁

市内獅子舞インデックス

第三部 羽咋の獅子舞百面相 五七頁

テング百面相

カシラ百面相

ベッサイ・ベシヤラ百面相

第四部 特論 六七頁

第一章 はじめに

第二章 序論

第三章 能登獅子の八つのグループ

第四章 六つの往来

第五章 本論

第六章 キョウブリ論

第七章 おわりに

第一部 羽咋の獅子舞概説



第一章 事業の概要

① 事業の目的

石川県羽咋市は、能登半島の付け根に位置し、金沢方面から見ると、能登への入り口にあたることから「口能登」地域と呼ばれている。加賀・能登・越中を結ぶ立地にあることから、歴史的にも文化の交差点として発展し、それを物語る特徴的な文化財が多数存在している。羽咋の獅子舞文化もそのひとつであり、市内の祭礼を彩る郷土芸能として親しまれている。

羽咋の獅子舞は、能登地域のなかでも、非常に熱心に行われていることで知られ



羽咋市の位置

る。その系統をみると、旧来から伝わる在地型の「能登獅子」型をはじめ、東接する富山県氷見市から伝わった「越中獅子」型、金沢市から伝わった「加賀獅子」型が混在する。三系統の獅子舞が見られる地域は、能登では他に無く、羽咋の地域性をよく物語っている。これらの獅子舞は、市内五八町会（集落）で個々の集落単位で伝承されるため、類似はあっても全く同じ演舞は無く、多様性を持つ一方で、隣町同士でも互いに獅子舞を見たことがないなど閉鎖的な側面もあり、独特の獅子舞文化を形成しているといえる。

羽咋の獅子舞は、各集落の祭礼で演舞される。その演舞は、主に小中学生が担い、そのOBである高校生や青年団たちが教え、伝承している。子供たちは、祭礼までの練習期間で、演舞技術とともに集落の様々な伝統やルールも先輩たちから教わり、祭礼当日の熱気を共有することを通して集落の一員になっていく。獅子舞は、世代間交流や地域教育の場としても機能しており、「地域力の根幹」ともいえる重要な

意味を持っている。

一方で、祭礼での獅子舞を実施する集落（町会）は、昭和五八年には五五町会で行われていたが、現在では、四四町会にまで減少しており、その保存と継承は、集落の少子高齢化を象徴する大きな課題となっている。

こうした状況のもと、獅子舞の現在の実態を調べ、記録して保存し、その特徴を情報発信して交流する場を作ることにより、獅子舞を通じた地域活性化を目指そうと、市内外の有志が集まり、平成二七年に「はくい獅子舞保存活性化実行委員会」を組織した。そして、同年度から文化庁の補助事業を活用して、調査研究・映像記録作成・情報発信・交流普及を柱とする「はくい獅子舞等の総合的把握による地域活性化推進事業」をスタートした。本書は、この事業のうち、主として調査研究事業の成果を取りまとめたものである。

事業名（採択事業名）

はくい獅子舞等の総合的把握による地域活

性化推進事業

文化庁補助事業

平成二七年度～平成二八年度

「文化遺産を活かした地域活性化事業」

平成二九年度～平成三〇年度

「文化遺産総合活用推進事業」

事業主体

はくい獅子舞保存活性化実行委員会

② 事業の経過

事業は、「調査研究事業」「映像記録作成事業」「情報発信事業」「交流・普及事業」を四つの柱とし、その他、獅子舞用具の新調・修理を行う「継承事業」（平成二八・二九年度）も実施している。各事業の概要は次の通りである。

一、調査研究事業と映像記録作成事業

～各集落の獅子舞を調べ、記録する。～

実行委員会で、まず取り組んだのは、市内各集落の獅子舞の演目等の聞き取り調査と映像記録作成による記録保存である。演目等の聞き取りにより、その詳細情報を整

理したことは、大きな成果である。また、映像記録は、祭礼の熱気も収録できるため、集落の祭礼記録のほか普及用映像制作にも適しており、展示や出前講座において積極的に上映して好評を得た。また、万が一、獅子舞を中止・休止する集落があっても、その映像が、将来復活させる際の基準資料にもなる。以上の作業を、市内獅子舞の総合的把握の基盤作業と位置づけ、進めていった。

二、情報発信事業と交流普及事業

～魅力と情報を伝える交流の場づくり～

この調査研究の成果を発信するための基盤整備として、実行委員会のウェブサイト制作した（平成二七年度）。これを更新しながら、市内の獅子舞の動画を視聴できるように整備していく計画である。あわせて、SNSサイトも立ちあげ、電子空間上での交流拠点とし、祭礼と獅子舞情報や企画展や特別講座等のイベント告知を行い、情報発信ツールとした。

しかし、目的とするのは、獅子舞を題材とした“直接的な顔の見える”交流の場づ

くりである。この実現のため、実行委員会メンバーによる出前講座とビデオ上映会を開催し、各地に出向いて様々な地域と年齢層に羽咋の獅子舞の魅力を伝え、理解と協力を求めている。



そして、羽咋市歴史民俗資料館を会場に、獅子舞を題材とする企画展示を開催し、その成果を公開するとともに交流の場とした。平成二七年度は、市内各町会の獅子頭、平成二八年度には、天狗面と烏帽子等の獅子舞用具を網羅的に借用して展示した。これは、他地区の獅子舞用具を見比べ観察できるよう意図したもので好評を得るとともに悉皆調査としても重要な成果となった。平成二九年度には、その歴史を深める企画として、江戸後期から明治・大正期の近現代にかけての古い獅子舞用具等の関連資料を借用・展示して、その歴史を考察した。平成三〇年度は、これまでの調査成果の取りまとめと位置づけて、羽咋市の獅子舞の特徴といえる「加賀・能登・越中」の獅子舞をそれぞれ紹介し、獅子舞文化の多様性を考える展示を開催した。

展示会場では、映像記録作成事業で製作した獅子舞ダイジェストビデオを大型スクリーンで上映する「シシシアター」も特設し、来館者に「他所の獅子舞、見たことありますか？」と問いかけ、意識的に他地区の獅子舞を見る機会を増やしていった。

また、展示期間中に有識者による特別講座（平成二七・二八年度）、実行委員会メンバーによる講座「シシトーク」（平成二九・三〇年度）も開催し、獅子舞を題材とした交流の場づくりを実現するよう複合的に実施していった。

展示の来館者アンケートには、普段見る機会の少ない他地区の獅子舞を見たことによる驚きが多く寄せられ、手ごたえを感じた。同時に、借用した展示資料は、実行委員会のメンバーにより撮影を行い、郷土資料としての獅子舞用具の悉皆調査と記録資料化を進めることができた。

三、継承事業

〓獅子舞用具の修理等による適切な継承〓
調査研究事業の聞き取り調査では、実際に獅子舞用具を見せていただく機会もあった。その際に、獅子舞用具が劣化・破損により使用できない状態で、本来かつ従来のすがたでの演舞が実施困難となっている地域を知ることとなった。その改善のため、平成二八年度に滝町のカヤ装束の新調、千代町为天狗烏帽子の修理、平成二九年度に

柴垣町のベシヤラ面の修理を行った。これにより、祭礼での本来の用具を用いた演舞を実現することができ、適切な継承につなげることができた。



実行委員会のウェブサイト
<http://hakui-shishimai.com/>

平成 27 年度

市内 52 町会から獅子頭を借用・展示。総覧的に見比べることで系統ごとの特徴を解説した。



平成 28 年度

市内 48 町会から天狗面と烏帽子、ベッサイ面等を借用・展示。総覧的に見比べることで系統ごとの特徴を解説した。



平成 29 年度

市内の江戸末期～明治・大正・昭和初期の獅子舞の歴史資料を借用・展示。そのルーツを解説した。



平成 30 年度

市内の三系統の獅子舞をそれぞれ展示し、その特徴と多様性を解説した。



第二章 総論

① 石川・富山の獅子舞

石川県は、加賀地域と能登地域に大きく分けられ、それぞれに獅子舞文化が形成されている。加賀地域では、金沢市を中心に、南は白山市・能美市・小松市・加賀市など南加賀方面、北は津幡町・かほく市付近にまで「加賀獅子」と呼ばれる獅子舞が広く分布している。とくに金沢市周辺では、加賀百万石文化を象徴するような超大型の獅子と、これに対峙する棒・薙刀・太刀・鎖ガマなどを手に演舞する「棒振り」と呼ばれる少年・青年層の武芸の所作による獅子舞が浸透し、多数の流派があることで知られている。獅子の胴体のカヤをドーム状に大きく張り、お囃子も含め、三〇〜四〇人を超える人数で渡御を行う。

能登地域では、羽咋郡市（羽咋市・宝達志水町・志賀町）の口能登地域から、邑知地溝帯で結ばれる中能登町・七尾市に達する中能登地域にかけて獅子舞が顕著に分布する。おもに旧来から能登地域に伝承されてきた在地型の「能登獅子」が中心で、日

本海側では、宝達志水町南部の旧押水町域から羽咋郡志賀町北部の旧富来町域・輪島市門前にかけて、七尾湾側では、七尾市能登島を取り囲む中島、田鶴浜、穴水町あたりまで分布する。これより北部の珠洲市・輪島市・能登町の奥能登地域へ行くと、獅子舞は非常に少なくなる。輪島市では、氷見獅子も習い伝承されており、旧来からの在地の能登獅子は希薄である。

また、奥能登地域では「行道獅子」も存在する。これは、獅子頭を木杵にのせて頭上部に担ぎ、祭礼の神輿渡御を先導して独り立ちにて「行道」する舞わない獅子で、古式を残す形態とされている。

このように、奥能登では、獅子舞は点状とするものの伝承数は希薄であり、口能登・中能登地域に比べて、祭礼に伴う芸能として浸透しなかったと考えられる。これは、巨大灯籠を担ぐ「キリコ祭礼」を重視する祭礼文化と深く関わっていると考えられる。奥能登地域および志賀町・七尾市石崎にかけては、祭礼と言え「キリコ・奉燈」の巡行であり、同様に羽咋から七尾周辺にかけては、祭礼と言え「獅子舞」を重視

する文化圏があることを表している。

富山県では、非常に多くの獅子舞が伝承されていることで知られる。とくに氷見市では、獅子舞の伝承数が出出しており、県境に接する羽咋市・中能登町・七尾市にも分布し、さらに邑知地溝帯を渡って、志賀町にも氷見から習った獅子舞が見られる。富山県内では「氷見獅子」に分類される形態で、羽咋では「越中獅子」と呼んでいる。

氷見獅子は、獅子の胴体であるカヤに四〜五人が入り、足を揃えて舞い一匹の獅子の動きを表現する百足獅子型で、これに対峙する鼻高面に黒色の烏帽子をかぶった天狗と一体となった激しく勇壮な演舞が特徴である。

氷見獅子は、高岡市をはじめ周辺にも伝播するが、その先の射水市でも同様の百足獅子型の獅子と天狗による「射水獅子」が見られる。射水獅子の天狗は、「ジャグマ」と呼ばれる毛冠に鼻高面をつけるものもみられ、氷見獅子のような黒烏帽子をかぶる地区と混在している。演舞内容も、長弓や松明など多彩な捕り物を持って踊り、氷見獅子とは異なる要素を有する。

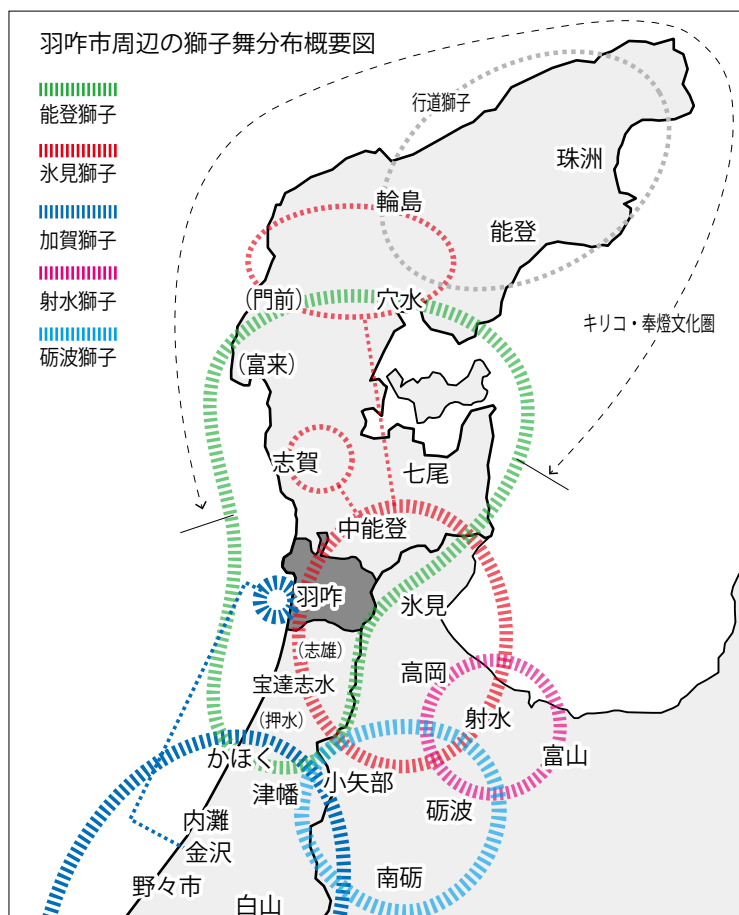
その南部の砺波市では、カヤに五〜六人が入って舞う百足獅子型ながら、内部に竹輪を張って、手に持ち、その胴体を大きく見せる「砺波獅子」が顕著である。その西部の小矢部市や南砺市にかけてもこの傾向がみられ、獅子頭も大型である。獅子に對峙するのは「シシトリ」と呼ばれる子供たちの演舞で、氷見獅子や射水獅子のような天狗は見られない。

砺波獅子は、氷見獅子のように足を揃え舞う形態でありながら、胴部のカヤは加賀獅子のように大型の獅子を志向し、對峙するシシトリも棒・ナギナタ・太刀・鎖ガマなど、加賀獅子の棒振りと同様の捕り物をとって演舞することから、金沢の加賀獅子の影響を受けていると考えられる。砺波・小矢部・南砺地域は、歴史的にも加賀百万石文化圏と深く関わってきた地域性とその立地から、氷見獅子と加賀獅子の両方の形態的要素をもつ獅子舞と位置づけられる。

ちなみに、能登獅子と加賀獅子の境界範囲にあたる石川県羽咋郡宝達志水町南部の旧押水町周辺には、加賀獅子と能登獅子の共通要素を持つ獅子舞が分布している。

かほく市に接する宝達志水町最南部の北川尻を例にすると、能登獅子の獅子頭にカヤが入る百足獅子型ながら、獅子頭が歯を鳴らすのみで舞いが無く、笛・鉦によるお囃子が無い。唯一「タイコブリ」の演目で太鼓が鳴らされるのみである。カヤは腕を上げて広げ、尻尾部はさらに棒で高く持ち上げて峰を作るように張り、胴部を大きく見せることを志向しており、加賀獅子的で

ある。これに對峙する天狗は、「シャンガン」と呼ばれる毛冠に鼻高面をつけた能登・越中獅子と同様の狩衣装束ながら、「棒振り」のような演舞を行う。「加能型」ともいふべき折衷型である。





加賀獅子(金沢市大場町)



行道獅子(輪島市町野町佐野)

撮影: 渋谷利雄 S50年代



砺波獅子(富山県砺波市西中)



氷見獅子(富山県氷見市論田)



加能型(宝達志水町北川尻)

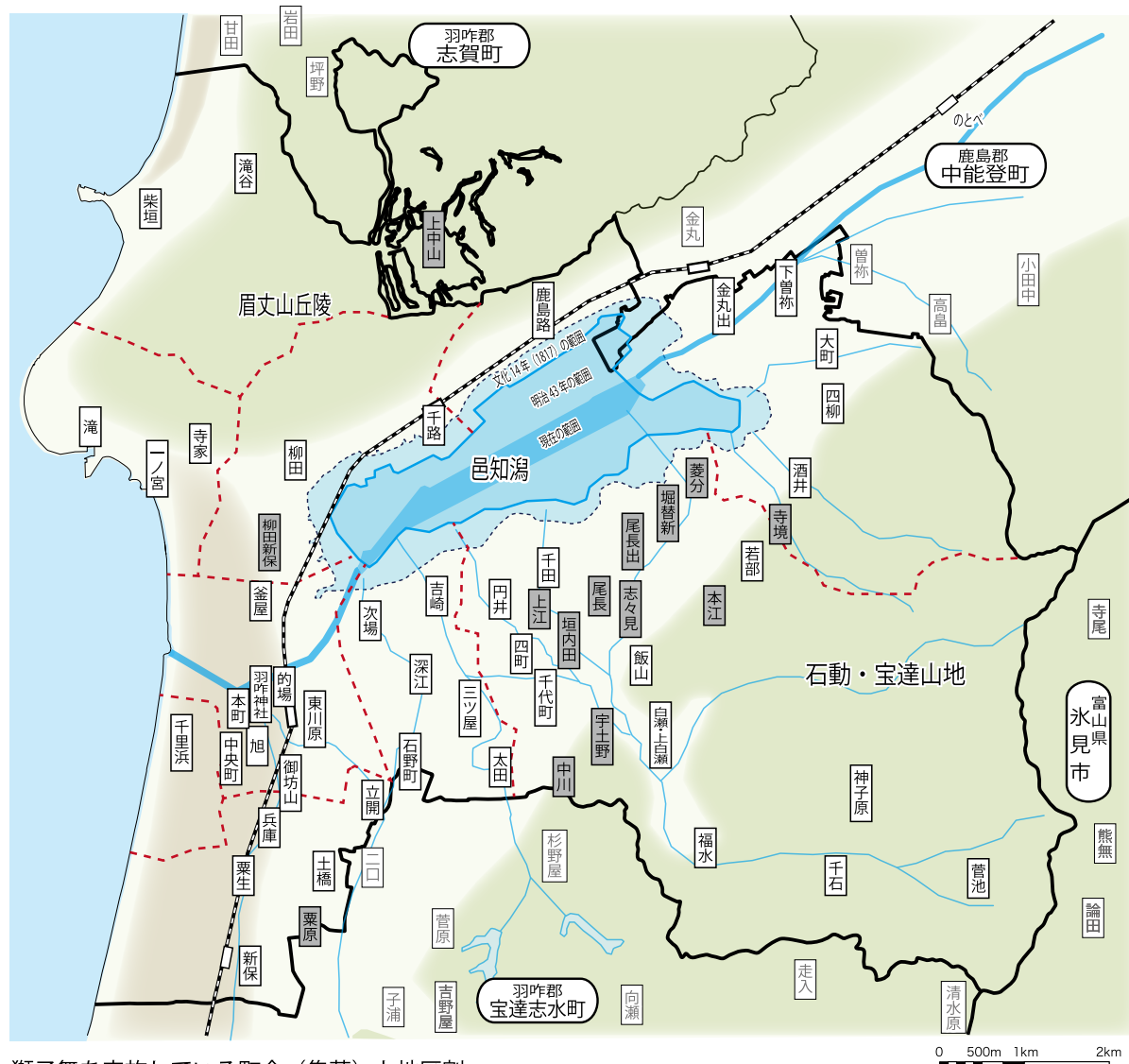
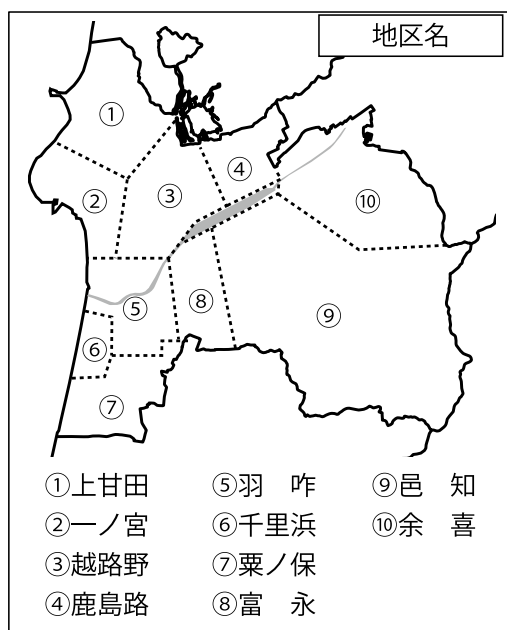
撮影: 渋谷利雄 S50年代



射水獅子(富山県射水市新湊)

② 羽咋市の集落と獅子舞

市内で祭礼時に獅子舞を実施している町会（集落）は、現在四四町会で、過去に実施していたが現在休止・中止している町会も含めると五八町会であり、新興の団地等の地区を除いて、旧来の全ての町会で獅子舞が伝承されている。このうち、北部の志賀町、東部の中能登町・富山県氷見市、南部の宝達志水町と接する地区では、隣接集落同士の生業関係、縁戚関係、寺院の門徒・檀家関係、耕作における同一水系の共有などによる結びつきが強く、行政区を越境する同じ生活文化圏を共有している場合が多く、獅子舞文化を考察するうえで重要である。



獅子舞を実施している町会（集落）と地区割

※ グレー塗りの町会は中止・休止中。羽咋地区の旭・中央・本町・東川原・御坊山・的場町会以外は、「羽咋神社」として表記した。

とくに、市内北部の上甘田地区の柴垣町・

滝谷町および越路野地区の上中山町は、旧来は、現在の志賀町に属する旧上甘田村、旧下甘田村の集落であった。同様に、市内東部の鹿島路地区と余喜地区の集落は、現在の中能登町に属する鹿島郡の集落であった。これらの集落は、羽咋市が昭和三年に市制施行する際の一連の合併により越境して編入されたものであり、生活文化圏としては、旧来の志賀町や中能登町との関係が強く、獅子舞においても一程度の類似性が見られる。

現在の市域は、十地区で構成されている。この「地区」は、前述した生活文化圏を基盤に近世以来の集落相互の関係を有している。ただし、獅子舞については、集落の神社の祭礼に伴い個別に集落単位で伝承されるため、集落を跨いで同一の獅子舞を共有するような事例は見られない。したがって隣集落同士でも、地区的な一程度の類似性はあっても、全く同じ演舞・お囃子は無く、個々に独自性を有している。市内各集落の獅子舞文化が多様であるのは、これに起因する。

③ 獅子舞の役割と神輿渡御

市内では、集落の春季・秋季祭礼のどちらかで神輿渡御と獅子舞が実施される。春季に獅子舞を行う地域は、現在休止・中止中も含め、余喜地区の全集落、邑知地区の寺境・若部・志々見・宇土野・白瀬・中川であり、石動山系に沿う地域に限定される。その他は、秋季祭礼である。ただし、越路野地区の千路町、邑知地区の飯山町は、夏季の納涼祭で獅子舞が行われており、例外的である。

祭礼では、神社での神事のあと、祭神が神輿に遷される。神社境内で獅子舞の奉納が行われた後、神輿は神社を発ち、集落内を渡御・神幸する。獅子舞は、神輿の渡御道中の先導役として最前方を進むことから、魔除け、露払い、悪魔祓いの役割を担うものとされている。

この渡御は、獅子舞と囃子方を先頭に神輿が続き、神職・町会長・青年団長らが随行し、行列をなすのが基本である。獅子舞と神輿のあいだに御幣・幟・稚児隨身などが入る地区もあるが、少子高齢化などによる人不足のため省略されている地区が見ら

れる。

渡御道中は、集落内の必要な辻（交差路）、祠堂、御旅所などを回って神職が祝詞奏上して祭祀し、そこで獅子舞演舞の奉納が行われる。集落内をめぐる渡御道中は長距離になるため、各所に「宿（やど）」と呼ばれる休憩のための世帯が設けられる。このほか集落内で結婚や出産などの慶事があった家では、神輿を招いてその慶事を祭神に報告し、家内の安寧と弥栄を祈る「ご招待家」が設けられる。これらの宿や招待家では、世帯主が親戚・客人等を招いて酒食を用意し、神職らをもてなす。そして、世帯主とその客人らは、獅子舞や神輿の担ぎ手への労いとして酒・肴や金一封などの祝儀を渡す。これを「花を打つ」という。この「花」を受けた獅子舞は、その主人の名を独特の口上とともに詠み上げて披露し、「花の御礼」として返礼の演舞を行い、その家庭を祝福する。ひと通りの演舞を終えると、次の招待家などに移動する。渡御の全工程を終えると、神輿は神社へ戻り、祭神を本殿に再び遷して祭礼が終了となる。この時の獅子舞奉納で地区によっては「獅子殺し」の演



渡御行列(神子原町)

獅子舞を先頭に神輿と神職らが続く。神子原の渡御行列は、神輿の担ぎ手の白丁装束と周囲の棚田景観が相まって、渡御の原風景を見ようである。

目が演舞され、祭礼の締めくくりとなる。
この神輿渡御は、平安時代後期には始まり、全国に普及していったとされている。本来は神社に坐す神を神輿に遷して移動可能としたことにより渡御行列が発生した。これに伴い、行列の構成員として神輿の先導役である猿田彦や獅子舞などが生まれていったとされている。行列は、今も昔も変わらず、人々にとつての最大の見物対象であり娯楽である。獅子舞は、神の先導役として祭礼の重要な役割を担うと同時に、集落最大のハレの日を彩る娯楽として芸能化し地域に浸透していったと考えられる。

花の口上(神子原町の場合)

「^{とざい}東西、^{とうざい}東西、^{もくろく}目録がひとつ。^{おんさけさかな}御酒肴は^{さーわやま}沢山。右は、〇〇町よりお越しの〇〇様より^{ごひいき}ご贔屓とあずかりまして、^{みょうだい}神子原町壮年団にくださーる。名代として花の御礼！」

神子原町をはじめ、越中獅子型の集落では、これが基本形として伝わっている。能登獅子型の集落でも概ねこの形態が基本形で、広く浸透している。



「ご招待家」での神事(千路町)

座敷などの広間に祭壇が設けられ、神輿が横付けされる。神職による祝詞奏上が行われ、慶事の報告、家庭の安寧と弥栄が祈られる。

花の口上(四柳町の場合)

「^{とざい}東西、^{とうざい}東西、^{もくろく}目録がひとつ。^{おんさけさかな}御酒肴は^{さーわやま}沢山。^{にんき}人気は益々、^{まーすます}栄当、栄当。右は、〇〇市は〇〇町の住人。〇〇の〇〇様より^{ひいき}当獅子舞保存会にご贔屓とあって、^{ひいき}■■■■をくださーる！」

■■■■…四柳町では、祝儀の主人の職業などに合わせて、誇張してアドリブで披露し、笑いを誘う。(例:「注射器たくさんくださーる！」(病院勤務の場合)。「羽咋の米、全部くださーる！」(JA職員の場合)など。



花の披露と口上(深江町)

「花(酒や金一封)」が贈られると、獅子方の代表者である青年団長などが「花紙」を広げて感謝の口上を述べ、獅子舞を演舞する。

第三章 羽咋の獅子

① 市内の獅子舞、三系統。

前章に述べたように、市内には、加賀獅子、越中獅子、能登獅子の三系統の獅子舞を見ることができる。これは、非常に珍しいことであり、加賀・能登・越中を結ぶ羽咋の地理的特性をよく物語っている。内訳は、休止・中止している町会も含めて、加賀獅子が三町会、越中獅子が一五町会、能登獅子が四〇町会あり、在地型の能登獅子が最も多い。

② 加賀獅子「祇園獅子」

加賀獅子は、金沢を中心に加賀地域に広範囲に伝わる超大型の獅子で知られ、獅子の胴体のカヤのなかに太鼓・笛・三味線などのお囃子衆が入るほど大きく、その先頭に立つカシラも豪華で非常に大きいことが特徴である。この獅子に対峙するのが「棒振り」と呼ばれる少年から青年層の若者たちで、棒のほかに薙刀や鎖鎌などを持って獅子を倒す武芸の所作が見どころである。

藩政期から武芸の修練として伝えられてきたこともあり、金沢市では、その流派が複数存在する。

羽咋には、明治三〇年代ごろ、金沢出身の島出町の遊郭の料理人が教えたと伝えられている。羽咋神社の氏子町会のうち、中央町、本町、旭町で伝承されており、「祇園獅子（ぎおんばやし）」と呼ばれ、秋季祭礼で、各所で演舞をしながら町内を練り歩く。お囃子は、太鼓・三味線・笛で、曲目は三町ともほぼ同じで、本町を例にする
と「ジャンシャンシャン」「サカサツサ」「ジャンチュコンチュ」「禅（トンレントンレン）」「夜神楽（トントントンチンチン）」「コンチエコン」「宮参り」「七丁目」「金沢殿様」「長唄（元禄花見踊）」がある。

獅子頭は大型で、胴体のカヤも大きく、十メートルを超える長さである。ドーム状の骨組みを用いて張り、内部にお囃子の太鼓を取り付け組み立てる。獅子頭は、青年団などの若者層が担当し、カヤを背後に獅子頭を操り、獅子の動きや睨みを表現する。これに対峙する棒振りは、小中学生の子供たちが担当し、獅子頭に向かって武芸の技

を見せながら近づき、最後に「ヨイヤ！」の掛け声で獅子を制す。棒振りの道具は、中央町を例にすると、棒・刀・薙刀・鎖鎌の武具が基本で金沢型と同様である。このほかに尺八や看板を使用する演舞もあり、これらは分離する仕込みが入っており、両手に持って武具として使用する。

羽咋の祇園獅子は、加賀獅子の北限であり、流派は不明ながら金沢型の加賀獅子が直接的に伝播し、伝承されている例として非常に珍しい事例である。



加賀獅子「祇園獅子」（中央町）

お囃子衆を伴う大型のカヤを背にカシラと棒振りが対峙する。

③ 越中獅子

羽咋では、富山県から伝わった獅子舞を「越中獅子」と呼んでいる。東接する氷見市の論田・熊無地区から習い伝わった「氷見獅子」である。明治二〇年ごろに神子原町などの中山間地域に伝わり、その後、邑知地区の里方へと広がっていった。羽咋神社氏子の東川原町、的場町、御坊山町は、昭和末より平成初期に習い導入したもので比較的新しい。また、柴垣町では、同じく明治二〇年ごろ、氷見ではなく高岡市から、出稼ぎ者が習い伝えたとしている。

はげしい太鼓とカネのリズムに合わせた勇壮活発な踊りが特徴で、子供たちではなく、青年団・壮年団らによる若者層の演舞が中心である。演目は、氷見獅子に特有のもので、「ヒトアシ」「フタアシ」「バイガエシ」「ヤツブシ」「ヨソブリ」などがあり、どの集落でもおおむね同演目が共有されている。したがって、氷見獅子を行う他地区の者が見ても、演舞とお囃子で演目を言い当てることが可能で統一性がある。天狗は、能登獅子と同じく、烏帽子に鼻高面をつけ、装束は狩衣の上に、胸部に胸当てを付ける。

天狗が手にする捕り物は、演目によって異なり、棒、杉葉、刀などがある。獅子頭は、非常に大型で井波彫刻の彫師が多い。このため表情も統一性がある。氷見獅子では、赤塗りの獅子頭しか見られないが、羽咋では太田町で黒塗りのみ見られる。内部の取っ手を握り、頭部を獅子頭に入れて、これを軸に取り回すようにして獅子を表現する。下顎だけが軸棒により動く構造で、内部から天狗を見ながら演舞し、時に大きく噛んだり歯を鳴らしたりして威嚇の所作を行う。

「舞い」の性格が強い能登獅子に対し、越中獅子は、「獅子殺し」の演目があるように天狗と獅子の格闘色が強く「闘いの獅子」とも言える。獅子殺しは、祭礼の神事を終えた最後にだけ奉納される演舞で、特別な演目である。夜刻に行われる一時間以上におよぶ非常に長い演目で、天狗が獅子をあやし挑発し、時に劣勢になるなどのやり取りが続ぎ、最後に刀で切つてとどめを刺し、息絶えたかどうかを確認したのちに歓喜を表し退場する。この非常に長く物語性のある演舞の表現が、天狗も獅子も最大の見せどころであり、見る者をひきつける。



千石町 獅子殺し

千石町の獅子殺しでは、境内に藁が敷き詰められ、演舞のための空間が設けられる。写真はテングが獅子を刀で斬る瞬間。



神子原町 ヨソブリ

氷見獅子のカシラは、獅子頭の内部に頭を入れて演舞する。ヨソブリは高額な花が出た時に演舞される上位の演目とされている。

④ 能登獅子

市内の多くの集落で伝わっている在地型の獅子舞で、いま述べた加賀獅子、越中獅子が伝わる以前から伝承されている。

小中学生による「小獅子」が中心で、お囃子に合わせ天狗と獅子がともに演舞する。大きく分けて二系統が見られ、流暢なお囃子にあわせて大きくゆったりと舞う地域とカネ・太鼓・笛のリズミカルなお囃子で活発に舞う地域がある。

演目は多彩で、「キョウブリ」「サッサイ」「ホウダツ」など共通するものが見られるが、その地区にしかない個別の演目も相当数あり、全体で見ると非常に多様性がある。このことは、非常に長期間にわたる集落単位でのガラパゴス的な独自の進化・伝承の結果と考えられる。こうした現象は、ほぼ統一的な演目を広く共有する越中獅子では見られない傾向である。

天狗は、烏帽子に鼻高面をつけ、狩衣装束で、棒を用いて獅子をあやしたり、挑発したりしながら獅子と共に舞う。越中獅子にみられるような他の捕り物はなく、棒のみを使用する。獅子は、獅子頭を先頭に四

人ほどのカヤが入る百足獅子型である。獅子頭は小型で上顎と下顎が分離し、両者を金具で接続する構造で、取っ手は頭頂部と下顎底面にあり、前方に上下に持ち、噛む所作やガチャガチャと歯を鳴らす所作で獅子を表現する。獅子胴部のカヤは、牡丹唐草文様で、越中獅子に見られる赤一色の緋ガヤは見られない。腰を曲げずに腕を上げ、カヤを張る・振るなどして踊る地域と腰を曲げて腕を降ろし左右に振って踊る地域がある。基本的には天狗一人に対し獅子一匹の構成だが、富永地区と邑知地区の一部では、天狗一人に獅子二頭を左右に配置する演目も見られる。

お囃子は、笛・太鼓・鉦が中心で、余喜地区では横笛、その他の地区は六穴の縦笛を使用する。市西北部の一ノ宮地区と上甘田地区だけは、その音から「ジャンジャン」と呼ばれるシンバル状の鳴り物を使用している。鉦は、打音と摺り音の組み合わせで「カンカンチクリ（打・打・摺り摺り）」と鳴らすのが基本であるが、羽咋神社小獅子や千里浜地区では、打音のみの演目も見られ独特である。



千里浜町

基本的に腰を曲げずに立って腕をあげ、カヤを張る・振るなどして踊る系統である。（※演目によっては腰を曲げるものもある。）



千代町

能登獅子では、カシラはその構造から前方に持って鳴らし演舞する。千代町は、カヤは腰を曲げて左右に振る系統である。

羽咋の獅子舞・・・3系統の獅子舞を見ることができる地域性。歴史的にも加賀・能登・越中の交差点。

能登獅子・・・在地型の獅子舞。市内の各地に分布。

天 狗→烏帽子に鼻高面。表情もさまざま。笑い面もある。烏帽子もさまざま。
 カシラ→上下分離型で取っ手がつく。表情は同じものがない。前方に持って鳴らす・振る。
 カ ヤ→4人程度の百足獅子。唐草模様。張って踊る地域と振って踊る地域がある。
 お囃子→笛（タテもしくはヨコ）、カネ、シメ太鼓。大太鼓はない。
 笛のメロディーが中心。笛だけ、カネだけ、の集落もある。
 お道化→天狗以外のおどけが出る集落もある。「ベッサイ」とよばれる面を付ける。
 獅子舞とともに神輿を先導。子供を背かしたりして、見物人らを楽しませる。

越中獅子・・・富山県から習った獅子舞(おもに氷見獅子)。山方から里方へ伝播。

天 狗→烏帽子に鼻高面。表情は統一性があり鬼面系。
 カシラ→アゴに軸部があり、下顎が動く。非常に大型で内部に取っ手が付き、
 頭部をカシラに突っ込んで舞わす。表情は統一性がある。基本的には赤塗しかない。
 カ ヤ→4人程度の百足獅子。唐草模様もあるが、基本的には論田熊無系の緋色。
 お囃子→笛（タテ）、カネ、大太鼓。大太鼓の拍子を中心。氷見のような豪華な太鼓台は無い。
 お道化→おどけが出る集落もある。神子原（ジジ・ババ面）。

加賀獅子・・・金沢市から伝わった超大型の百万石の獅子舞。羽咋では祇園囃子という。

棒振り→カタナ、鎖ガマ、ナギナタなど多種の獲物により武芸の所作をおこなう。
 カシラ→アゴに軸部があり、下顎が動く。非常に大型で、背面中央にタテ棒の取っ手がつく。
 カ ヤ→ドーム型に大きく張った胴体。練り歩く移動のため、骨組みに車輪が付く。
 お囃子→笛（ヨコ）、太鼓、三味線が鳴り物の中心。お囃子はカヤの中に入り演奏する。
 お道化→おどけ者はでない。

能登獅子

深江町



越中獅子

神子原町

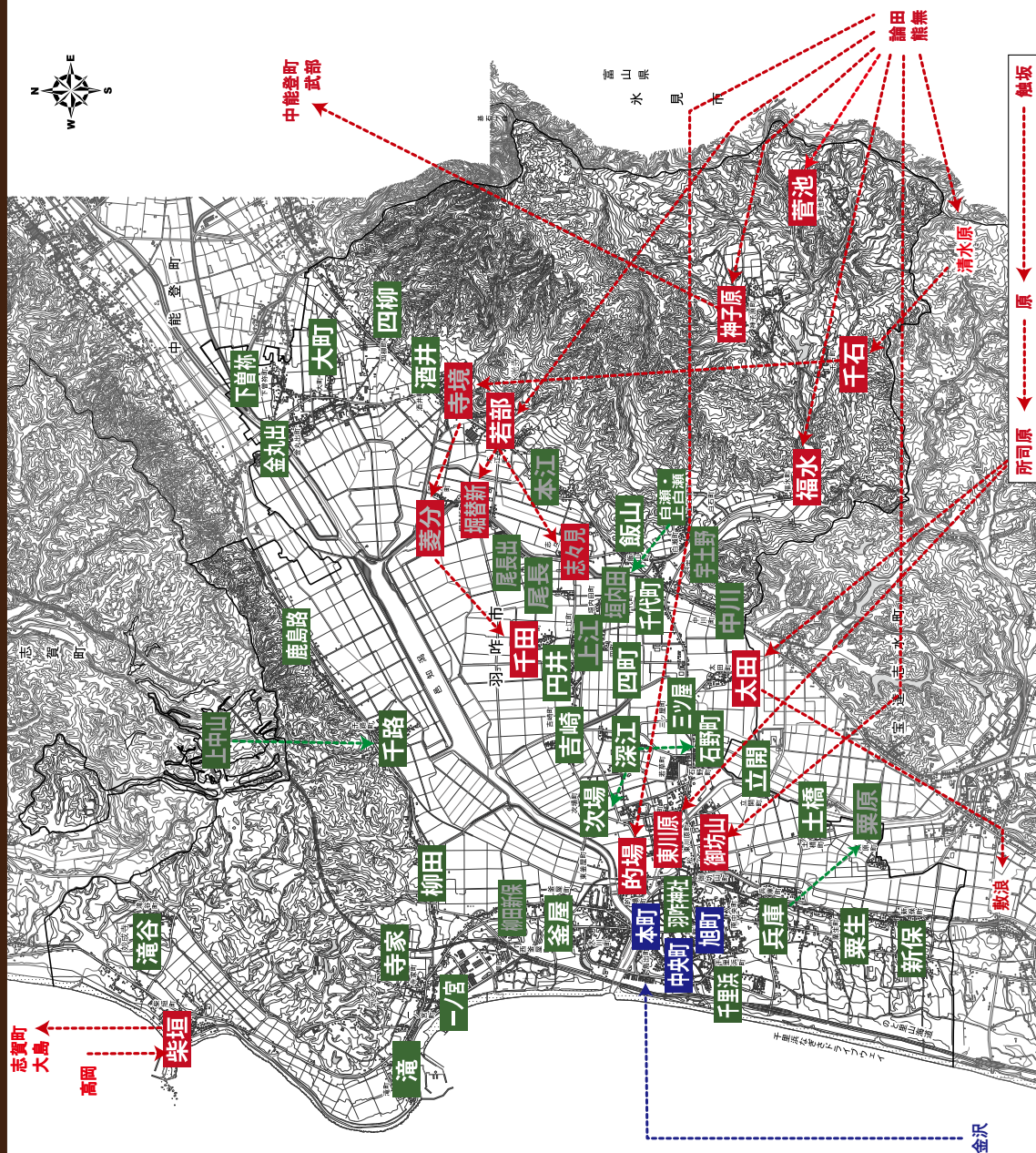


加賀獅子

祇園囃子（中央町）



羽咋の獅子マップ



獅子舞の種類

加賀獅子

能登獅子

越中獅子

グレー文字は、獅子舞を
中止・休止している町会
(H30 現在)

第四章 資料論

① 歴史資料からみた羽咋の獅子舞

羽咋の獅子舞のなかでも越中獅子を習い導入した町会では、「明治二十年代ごろ、氷見から習った」「昭和に入つて神子原から習った」などと伝承しており明確に回答する。しかし、在地型の能登獅子を伝承する地域で「獅子舞は、どこから習ったか」と聞き取りをしても「越中からとも聞くが、よくわからない」と明確に答えられる町会はない。これは、その経緯も不明となるほど時間が経過し、在地化が進んでいるということではないだろうか。越中獅子の集落で明治期に導入したことを四〇五世代程度にわたって伝承できていることを考慮すれば、仮に能登獅子の集落でも明治期に他地区から習い導入していれば、同様に回答するはずである。したがって、能登獅子は、少なくとも明治・大正期以前の江戸後期・末期には存在していたと考えられる。しかし、そのルーツを探ることが困難と言えるほど時間が経過していると考えられるのである。

では、地域での聞き取りが困難であれば、歴史資料を見ていく必要がある。市内で、最古の獅子舞関連資料は、深江町の鉦で、寛政十年（一七九八）の寄進銘が刻まれている。また、江戸後期の作と伝える神子原町の獅子頭は、古式を残す箱獅子型である。これらの資料から、羽咋地域には、どのような形態かは不明だが、一八世紀末にはこれらの用具を用いた獅子舞が行われていたと推定できる。

さらに、四町に伝わる『四町宮田家文書』の「御宮道具借用証文」は、文政四年（一八二二）に四町村が神輿と祭礼用具を質入れた際の借用証文で、華鬘や瓔珞、クジャク・小鳥・鈴などの神輿の装飾具とともに獅子舞力ヤ・天狗（はなだか）と



深江町の鉦「寛政十年」銘



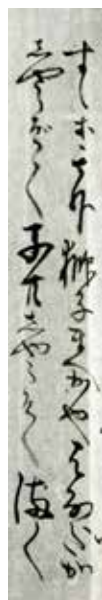
神子原町「獅子頭」

あり）装束などの獅子舞用具も質入れた記録がある。また、「こども装束」の記載もあり、幕末には現在の能登獅子に見られる子供らによる「小獅子」が存在していたことが確認できる重要資料である。



文政4年「御宮道具借用証文」『四町宮田家文書』
羽咋市歴史民俗資料館寄託資料

部分拡大（右四行目から）



すゝ等 其外 獅子まえかや はなだか
志やうぞく 子共志やうぞく まく

市内で紀年銘を有する最古の獅子頭は「千代町のドラジシ」である。「文久元年」（一八六一）の製作年と彫師「藤堂北運」の銘があり、上下顎が分離し、それぞれに取っ手が付く能登獅子型の獅子頭である。造形と彫刻に優れ、江戸時代後期～末期に顕著な四角い箱獅子型ではなく流麗かつ力強い竜頭型の造形がみどころである。

さらに、柴垣町のベシヤラ面「ダンゴバナ」も同年・同彫師の銘を有する。この面は、鼻を欠損しているために地元ではダンゴバナと呼ばれているが、本来は天狗の鼻高面であったと考えられる資料で、こちらも力強い表情の造形と彫刻が特徴的である。

彫師の藤堂北運については、「羽喰郡上中山村」（現在の羽咋市上中山町）の住人であったこと以外は、よくわかっていない。しかし、どちらも非常に精巧で力強い迫力ある造形で、優れた彫刻技術を持っていたことがわかる。どちらも同じ製作年月日であることから、千代町村、柴垣村の両村が、それぞれ、ほぼ同じころに製作を依頼したと考えられ、近郷の村々では、よく知られた彫師だったと考えられる。

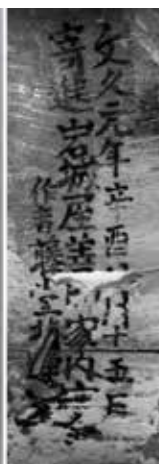


文久元年 辛酉
八月十五日
造者 羽喰郡中山村
藤堂北運

柴垣町のダンゴバナと同年
・同日の作品とみられる



千代町のドラジシ（文久元年 1861 藤堂北運・作）
頭頂部のツノの受け部に、寄進・制作者銘あり。



文久元年辛酉八月十五日
寄進岩城屋善■家内安全
作者 藤堂北運 花押



柴垣町のベシヤラ面「ダンゴバナ」（文久元年 1861 藤堂北運作）
裏面額部に寄進・制作者銘あり。

[illegible]

以上の資料から言えることは、江戸末期の一九世紀には、お囃子を伴う獅子頭と天狗面を使用した、子供らの小獅子による能登獅子型の獅子舞が存在していたということである。また、深江の鉦の年代から、そのルーツが、一八世紀後半～末までは遡ることができそうである。

これらの資料は保存状態が良好で、幕末から現在まで地域で大切に保管されてきたことに驚く。これらは、羽咋の獅子舞文化ばかりでなく、当時の羽咋の村びとたちの娯楽、芸能などの文化史を知るうえでも欠かせない絶好の資料でもある。

② 天狗（五八頁参照）

獅子舞を構成する演舞者の「天狗」は、そのいでたちも独特で、氏神の神紋を付けた烏帽子に鼻高面をつけ、華やかな狩衣装束を身にまといて演舞し、獅子舞の中でも一番の注目を集める存在である。

市内各集落の天狗面の表情を見比べると、見開いた眼と眉毛の表現、鼻の反りや長さ、ヒゲの表現など、ひとつとして同じものがない。これは、面が破損して新調す

る際には、従来のものと同じ表情で作りなおすことからわかるように、長く受け継いできた集落固有の表情といえる。

能登獅子では、眼を見開いた怒り面のほかに口角が上がった笑い面もあり、非常にユニークで多様である。一方、越中獅子では、鬼面系ともいえるべき憤怒の表情で氷見獅子と同系で統一性がある。氷見市から習い道具を用意する際に、その習い先の面をもとに製作したのではないかと考えられる。

天狗面と同様に烏帽子もまた、集落ごとの独自性がある。先端部の長さや形状が個々に異なり、集落固有の特徴を持っている。とくに、深江町や中川町の烏帽子は、全長が非常に長く、非常にユニークである。また、下曽祢、金丸出町の烏帽子は、伎楽系の色彩が濃厚で、鳥の鶏冠（トサカ）を想起させるまさに烏帽子といえる形状である。金糸などを用いて、瑞雲や流水紋などの吉祥文様を装飾性豊かに施した烏帽子は、天狗面とともに、祭礼の日をにぎやかに彩る、郷土色豊かな芸術品とも言える。

天狗は、獅子とともに神輿の渡御行列の

先導役を務めることは先に述べたが、全国の渡御祭・神幸祭の例では、神輿の先導役は天狗のいでたちをした猿田彦が務めるのが通例である。七尾市中島の久麻加夫都阿良加志比古神社の渡御行列が、まさにこれに該当し、神輿の先導役として猿田彦が練り歩くのはよく知られている。全国的にも、最前方の猿田彦に次いで獅子を伴う渡御・神幸祭は多数例があり、能登・越中獅子の天狗と獅子も、この渡御祭における行列文化の範疇に位置付けられよう。



金丸出町の渡御行列と天狗

烏帽子は他地区の黒烏帽子とは異なり、鶏冠を想起させる伎楽系。獅子を従え神輿渡御の先頭を歩く。いでたちも含め、猿田彦の役割とよく近似する。

③ 獅子頭(六二頁参照)

獅子頭もまた、天狗の面と同様に、集落単位で製作され、独自の表情を有しており、同じ表情ものがない。しかし、越中獅子の集落では、氷見に見られるように大型でサイズ・表情ともに一定の規格性がある。これも天狗と同様に、導入した際の習い先の獅子頭をモデルに制作したためと考えられる。一方、能登獅子の集落では、小型のものから中型までサイズも多様で、表情も多彩である。

越中獅子のカシラは、非常に大型で、胴部のカヤと接続して一体となるため、演舞者はカヤの内部から頭部をカシラに入れて、右上の取っ手を握って演舞する。下顎は軸棒により開閉する仕組みで、演舞者は下顎を支えながら獅子を舞わす。

加賀獅子(祇園囃子)のカシラも越中獅子とほぼ同等で大型である。構造は下顎に軸棒があり、越中獅子と同様に開閉するように動作する。ただし、カシラはカヤとは接続せず独立してカシラを操作するため、カシラの内部ではなく背面に取っ手となる

縦の軸棒が取り付けられている。

能登獅子は、子供らによる小獅子が一般的であることから小型・中型のカシラである。一部の地域で下顎に軸棒が入り開閉する構造のものもみられるが、氷見獅子のような大型のものは無く、大きさや演目内容によって区別が可能である。基本的には、上部と下顎が分離し、両者を金具で接続する構造で、上下の取っ手を持ち、前方で歯を鳴らす所作をするため、顎の接続部の後方に開閉させるための切れ込みが入っている。越中獅子や加賀獅子とは根本的に構造が異なっている。

しかし、これらのどれにも当てはまらないのが大町の獅子頭である。古式を残す竜頭を意識した扁平な箱獅子型で、歯を鳴らす所作が無いいため開口する構造になっていない。背後に二本の取っ手が取り付けられており、演舞者は、これを握って、前方に差し出したり、くねらせたりして、獅子の頭部の動きを表現する。大町の獅子頭は、周囲にも同系の例がなく、能登獅子の中でも極めてユニークで独自性が高い。



大町のカシラ

能登獅子型の特徴で上下が分離する構造ではあるが、開口する所作がないため、動かないようになっている。背後の2本の取っ手が特徴。



羽咋神社小獅子(左)と菅池町(右)のカシラ

市内最大の菅池町(越中獅子)と最小の羽咋神社小獅子(能登獅子)。演舞の形態の違いが、カシラの大きさ・構造と深くかかわっている。

④ 仮面の従者、ベッサイ・ベシヤラ (六六頁参照)

神輿の渡御行列には、天狗と獅子のほか「ベッサイ」や「ベシヤラ」とよばれる仮面の従者がいる地域もある。天狗の鼻高面とは異なる面を付け、神輿や獅子舞とともに練り歩き、子供たちを驚かせたりして見物客を楽しませ、時には一緒に獅子舞を踊り、祭礼を盛り上げる役どころである。一般に「お道化」などと呼ばれる存在で、見物客から祝儀の「花」の先乞いをしたり、獅子舞のスペースを確保したりする。

白瀬・上白瀬町では、サル・ベッサイ・バ



白瀬・上白瀬町のベッサイ
左から、ババ・ベッサイ・サル

バの三種の面があり、このうちベッサイは青色の顔に憤怒の鬼面で二本の太い青竹を手に練り歩き、まさしく青鬼である。サルは、柵を手に子供や女性らを押搦ったりして楽しませる役どころで、ババは、頭巾を被り小太鼓を叩きながら福を招き入れる役割で、これらは神の使いであり演舞者は声を発してはいけないといわれている。神子原町でも、ジジ・ババ面があり、宿での獅子舞演舞の場繋ぎなどで登場し、余興的に笑いを誘う。

柴垣町では、こうした仮面の従者を「ベシヤラ」と呼んでいる。ジョウベシヤラ、ハンニヤ、カラス、ダンゴバナ、ニコニコ、ハナカケなど多彩で、鬼面系、烏天狗系、喜面系の九面があり表情豊かである。これらのベシヤラ面は、秋季祭礼の一週間前に開催される「ケンクジ」と呼ばれる面競売行事で競りにかけられ、壮年団の若者たちがその権利を得るために競り落とす。競り落とした若者は、これを貸与され、神の従者としての権利を得た者として祭礼の日まで自由に使うことが許される。

一般的に渡御行列の構成として、最前方の先導役に猿田彦（天狗）と獅子があることは先述したが、その他の従者として翁や鬼など



柴垣町のベシヤラ衆
左から、カラス、ジョウベシヤラ、ハンニヤ。かつてはすべてのベシヤラが渡御に参加していた。渡御行列の前方を練り歩いて、神輿を先導する。



神子原のジジ面
獅子舞の場つなぎで余興的に登場する。石動山から降りてきた面と伝わっている。



四町のベッサイ
太い青竹で演舞する鬼面。近年では演舞できる者がいなくなっている。

の異形が随行し行列を構成する事例も全国には数多く見られる。神子原町のジジ・ババ面、白瀬町のババ面などは、この「翁」に相当する神輿渡御の従者であろう。その他のベッサイ、柴垣町のベシヤラ衆も、行列における「鬼」のたぐいに相当する異形の従者と位置付けられる。これらは、現在はお道化（おどけ）や賑やかしの役割をしているが、本来は神輿の渡御行列の構成員であつたと考えられる。こうした仮面従者は能登方面に顕著で、能登獅子の分布圈に加え、仮面行事が濃厚な奥能登地域にも見られる。氷見獅子では、余興を行うお道化のヒョットコやオカメが見られるが、こうした神輿渡御の構成員としての仮面従者は見られない。

羽咋市内では、少子高齢化による担い手減少によりベッサイを省略・中止する集落が多くなっている。ベッサイ・ベシヤラは、渡御祭・神幸祭の行列と獅子舞文化の関係や能登の仮面文化を考察するうえで非常に興味深い内容を有している。

⑤ お囃子衆

獅子舞を見に行こうと小さい子供を誘う

時、その擬音をとって「カンカンチクリ見に行こうか？」と言うことがある。獅子舞といえば天狗や獅子頭と同時に、お囃子の音曲がイメージされているのである。カネ、太鼓、笛があつて、獅子と天狗は、本物の生き物のように舞うことができるのであり、獅子舞には、お囃子が不可欠で一体的な存在なのである。

隣同士の集落でも獅子舞が異なるように、お囃子も似ているものはあつても、全く同一のお囃子はなく地域性がある。越中獅子では、激しい太鼓と鉦を中心とし、能登獅子では、笛の旋律が中心といえる。下曽杵・金丸出・大町・四柳・酒井町などの余喜地区では「横笛」を使用し、その他の地区では「縦笛」が中心となる。余喜地区は、横笛ならではの流暢な旋律のお囃子でゆつたりと舞うのが特徴であり、東接する中能登町でも同傾向である。また、滝谷・柴垣・滝・一ノ宮・寺家町の西北地区にだけ「ジャンジャン」とよばれるシンバル状の鳴り物がある。これは、本来は「妙鉢」と呼ばれる仏具の鳴り物であり、能登一宮気多大社やその神宮寺の正覚院、日蓮宗の北陸の本山

である妙成寺などが位置する地域性に関わるものと考えられる。

お囃子の装束は、多くの地区で半被を着ているのが通例である。しかし、羽咋神社小獅子、千里浜、釜屋、兵庫、栗原、一ノ宮、柳田新保では、お囃子の少年らが紺の着物に下駄ばきで花笠を被る（被っていた）。滝谷、柴垣、滝でも、紺着物は着用しないが花笠は被っており、同系に位置付けられる。市内でも浜側の集落にこの傾向が顕著であり、宝達志水町今浜など浜側集落にも見られる。浜伝いに獅子舞を共有する文化圏が推定される。



羽咋神社小獅子のお囃子
笛・鉦・太鼓があり、少年らが担当する

第五章 演目分布論

① 加能越の分布と伝播経路

調査研究事業として、各町会（集落）の青年団や古老などから獅子舞の演目、道具の呼び名、伝承先や由来について聞き取り調査を行った。これにより、市内各町会の加賀・能登・越中の分布を明らかにすることができた。

前章にも述べたように、越中獅子の集落では、明治期以降に氷見獅子を習い、導入しているため、古老たちの世代は、その経緯を伝承し受け継いでおり、明確に聞き取りすることができた。一六頁の「羽咋の獅子マップ」に示したように、羽咋の越中獅子は、伝承ルートをとどつていくと、ほとんどが氷見市論田・熊無地区に辿り着くことがわかった。

明治二〇年代に氷見市論田・熊無地区から神子原・千石・菅池の中山間地域へ伝わったのを直接的伝播とすると、邑知地区の里方は千石↓寺境↓菱分↓千田へ間接的伝播を繰り返して伝えられている。千田町では、明治四一年の銘を持つ能登獅子型の獅子頭と大正一一年の銘を持つ越中獅子型の

大型の獅子頭があることから、この間に菱分町から習い、能登獅子から越中獅子へ転換したことがわかる。仮に明治二〇年に千石へ伝わり、寺境、菱分を経て、大正一一年に千田に導入されたとすると三五年間である。およそ一世代の間に、論田熊無地域の氷見獅子が、三つの間接的伝播を経て、羽咋の邑知低地の里方まで伝わっている。

このほか、太田町、東川原町は、時期は異なるが、宝達志水町所司原から習っている。さらに辿ると、そのルーツは氷見市触坂に至る。所司原も宝達志水町と氷見市の境界に位置する中山間地域であり、羽咋の神子原などと同時期に、県境を越えて直接伝播したものと考えられ、それが太田・東川原町へ間接伝播したことになる。宝達志水町では、臼が峰往来の山越えルートが古代からあり、近世には「御上使往来」として床鍋越えでの往来がある。このほか三尾―向瀬往来の山越えルートもあり、山間地域独自の集落間ネットワークも存在する。そこから宝達志水町の旧志雄・旧押水地域の里方へ間接伝播していったとみられる。

市内各地の聞き取り調査では、導入のきっかけとして、氷見獅子のような勇壮な演舞を、わが町にも導入したいという当時の青年団らの熱意もあつたと聞くことができた。このことは、それだけ、お互いの集落の若者層が交流し合い、近隣の祭りを見に行つて情報を得ていたことを物語っている。獅子舞の伝播を調べることは、羽咋の近代以降の人の流れ、交流史を明らかにすることにつながっている。

② 演目一覧表からみた地域性

聞き取り調査での演目調べをもとに「羽咋獅子舞演目マトリックス」と題して、演目一覧表を作成した。これにより、市内には、じつに多数の演目があり、別表に示した通り、転訛によるものを統合しても、全地区で一一四演目におよぶことがわかった。

また、越中獅子と能登獅子では、演目がほぼ重複しないことを可視化できた。越中獅子の演目では、二三行目のキョウブリ以下が、ほぼ空白になるのである。その逆に、能登獅子の演目でも同様にキョウブリ以上

が空白となる。したがって、両者は、ごくわずかに重複はあるものの、演目を共有しないことが明らかとなった。これは、演目の名前・構成から、その集落が越中獅子かどうかを判断する指標にもなった。

越中獅子では、一行／八行目までの「獅子殺し」「ヒトアシ」「フタアシ」「バイガエシ」「ヨソブリ」「ドウチュウブリ」「ギオンブリ」「ヤツブシ」が、ほぼ基本演目として共有されている。これは氷見獅子においても同じであり、越中（＝氷見）獅子の演目は、非常に統一性が高いことを物語っている。これは、前章で述べた天狗面や獅子頭の用具の統一性にも関係すると考えられ、越中（氷見）獅子は、おおむね同質の獅子舞を、氷見市から羽咋市にかけて広範囲に共有していることが演目からも言える。おそらくこれは、近隣市町の越中獅子でも同じ傾向と思われる、今後の調査研究課題である。

一方、能登獅子では、越中獅子のような統一性は見られず、分散傾向である。最も多いのが「キョウブリ」で、ほぼ全地区の集落で共有しており、羽咋の能登獅

子の演目の代名詞と言ってよいほどである。これに次ぐのが「サツサイ」「ホウダツ」「サンサン」であるが、全地区に及ぶわけではなく、地区的な傾向がみられる。

演目マトリックス一覧表で、演目の分布が顕著でグループピングが可能なものを挙げると、邑知潟南岸の低地の里方に位置する富永地区と邑知地区の一部にかけて、「キョウブリ」「サツサイ」「ホウダツ」「サンサン」「ケトブリ」「カイチョボ（カイチュウブリ）」を基本演目とする一群が認められる（緑枠のグループ）。これは、能登獅子のなかでも流暢なお囃子による演舞が特徴の一群で、市内最古の獅子舞用具の深江町の鉦があることから、能登獅子の中でも古い一群と考えられ、「深江系」と呼ぶべきグループである。また、このグループでは、獅子殺しに相当する「チャリバ」という演目も独自に共有しており、他では見られず、グループピングが可能である。

この深江系の基本演目の一部は、邑知地区でも山手の本江・飯山・千代町・宇土野・中川にもおよんでいる。この一群

には、深江系にはない「オンボコ」「シツチョモサ」「チーシャロ」の独自演目があり、「邑知系」として設定することが可能である。

邑知潟北部から東岸に位置する越路野地区の千路・上中山から鹿島路地区、余喜地区にかけて、「キョウブリ」を基盤に、「ヤツマワシ」「ボンボコボン」を共有するグループがある（青枠のグループ）。さらに、このグループのなかで、後者の余喜地区では、「ムカシ」「ミチマワシ」が独自演目で、前者の越路野・鹿島路地区には見られない。このため、両者は細分が可能で、前者の越路野・鹿島路地区は邑知潟北部の眉丈山に位置することから「眉丈系」、後者の邑知潟東部に位置する余喜地区は「余喜系」としてグループピングが可能である。

邑知潟の西岸に位置し、日本海の浜側の地区にあたる越路野地区の柳田新保、羽咋地区、粟ノ保地区は、「キョウブリ」を基盤に、「サツサイ」「ホウダツ」「サンサン」を共有する一群である（橙色のグループ）。さらに、このグループのなかで、「ホウダツ」は立開を除く粟ノ保地区五集落に見られないことから細分が可能であり、この五集落

53	オヤオヤ
54	カタガリ
55	ドンチク
56	ヒヤヒヤロ
57	クサカリ
58	ボコボン
59	カタシシ
60	ヤマブシ
61	ヤッコフリ
62	エーヨイヤサッサイ
63	チツチシャロ
64	ヨイヤヨイ
65	ブタカス
66	シシマワシ
67	獅子納め
68	キタキタ
69	ハイカラ
70	マイタマイタ
71	ヨイヨイ
72	ツチアシ (ツツハジ)
73	ヒッチコ
74	ゴンバヤシ
75	ドウチュウ
76	ブンブク
77	シチベエサン
78	センダイノ
79	キウリ
80	ソゾリキウリ
81	ドンドコドン
82	アッサッサ
83	オタニ
84	チーチシャロ
85	カンツプシ
86	アツキラコ
87	ウエウエ
88	ウントコドツコイ
89	デルヤツ
90	デンヤツ
91	ヤッサヤッサ (いやさが、いやさか)
92	スギ
93	ボンノテ
94	オソマワシ
95	カンカン
96	ケムリ
97	スットコドツコイ
98	カタナサシ
99	ゴサカケ
100	シンマワシ
101	デルシンマワシ
102	ビービヤラ
103	サンサンノヒメ
104	マルマワシ
105	アバラ
106	ヒメ
107	ミチアルキ
108	道行き
109	サンサンナラビ
110	オツシヤ
111	オンポコ
112	オヒヒヤロ
113	ヨッサキ
114	豚ウブラ

[illegible]

を「粟ノ保系」とする。「ホウダツ」を共有する立開を含む羽咋地区と越路野地区柳田新保の一群は、市内最大の氏子を有する羽咋神社から名を取って「羽咋神社系」とする。

同じ浜側の地区でも日本海に面している一ノ宮地区と上甘田地区では、一ノ宮地区の滝・一ノ宮・寺家で「ゲンタイ」を共有し独自性があり、これを「一ノ宮系」とすることが可能である。上甘田地区の滝谷は、北接する志賀町のグループとの検討が必要であり、「上甘田系」としておく。

ちなみに、この上甘田系、一ノ宮系、羽咋神社系、粟ノ保系の日本海の浜側集落に分布する演目として「ゴサン」「キリマゼ」がある。これは、宝達志水町の浜側集落にも分布しており、海岸線を介した獅子舞伝承ルートとして、広くグループピングできる可能性があり、今後の調査研究課題である。

③ まつね

羽咋の獅子舞は、加賀獅子が直接的に金沢市から伝わり、越中獅子が氷見市から伝

わり、そして在地型の能登獅子が混在している状況で多様性がある。そして、能登獅子を細かく分析すると八つの系統にグループピングが可能であり、さらに多様な在り様が明らかになってきた。能登獅子は、近世後期から末期には存在していたことが確実視できることも述べてきたとおりである。近代に入り、明治二〇～三〇年代に加賀獅子・越中獅子が入ってきて、能登獅子から越中獅子へ転向する集落があることも確認できた。これまでの獅子舞をやめて新しいものを導入することは、大変なエネルギーのいることであつたと思う。それだけ、当時の祭礼と獅子舞を担う青年団らの若者層が、地域の祭礼を盛り上げ楽しみたいと考えていたのである。まさに獅子舞を通じた地域活性化事業である。

獅子舞を調べることは、羽咋の近現代を生きた人々の動きと集落相互の交流をもとに市内各地の地域性や特徴を知ることにつながっている。このことは、獅子舞の調査研究を基盤とした地域しらべ、地域学そのものと言える作業であり、本事業が目指してきた「はくい獅子舞の総合的把握による

地域活性化事業」の本質そのものである。

今後の課題として、羽咋市周辺の隣接市町の獅子舞調べを継続し、羽咋の獅子舞の特徴をより明瞭化していく必要がある。羽咋の獅子舞を正確に把握するためには、志賀町、宝達志水町、中能登町、七尾市、そして氷見市との関係性の整理による獅子舞文化の総合的把握が求められ、より精度の高い調査成果をめざし、獅子舞を通じた「地域活性化」への材料となるよう基盤作業を継続していきたいと思う。

第二部 羽咋の獅子舞 インデックス



能登獅子

羽咋神社小獅子



- ・神社名…羽咋神社
- ・氏子…旭町、大川町、川原町、東川原町、御坊山町、島出町、中央町、南中央町、本町、松ヶ下町、的場町
- ・団体…羽咋神社小獅子保存会
- ・祭礼日…九月第二週土日
- ・演目名…タツブリ、サンサン、ヨイヤッサ、シシマイ、ゴロク、シシゴロシ、キョウブリ、ホウダツ
- ・備考…花笠・紺を着用の子供達が笛・鉦・太鼓を使用。二日間かけて氏子町会のほぼ全てをまわる。小ぶりの黒塗獅子頭を使用。



能登獅子

千里浜町



- ・神社名…千里浜神社
- ・世帯数…九八二世帯
- ・団体…千里浜町氏子総代
- ・祭礼日…九月第二週土日
- ・演目名…シシマイ、ヨイヤッサ、サツサイ、キタ、ジジババ、ハイカラ、マイタマイタ、シオサメ、ヨイヨイ
- ・備考…小獅子、青年団、壮年団、それぞれの獅子がある。小獅子と青年団で二日間かけて全戸渡御。お囃子は、鉦、笛、太鼓。



能登獅子

釜屋町



- ・神社名…釜屋神社
- ・世帯数…一九〇世帯（西釜屋町含む）
- ・団体…釜屋町青壮年団
- ・祭礼日…九月二十三日
- ・演目名…モウタリタツブリ、ホウダツ、サンサン、サッサイ、ゴロク、キヨモリ、ツチアシ
- ・備考…全戸演舞のため二日間にかけて行う。少子化の影響に伴い、女子も獅子舞に入っている。



越中獅子

御坊山町



- ・神社名…羽咋神社
- ・世帯数…二四〇世帯
- ・団体…御坊山町獅子舞会
- ・祭礼日…九月中旬
- ・演目名…ヒトアシ、ギオンブリ、バンガエシ、ヤツブシクスズシ、ヨソブリ
- ・備考…町内では演目を「一番」、「二番」、「三番」と呼称している。三〇〜四〇年前に熊無から習った。お囃子は、笛、鉦、太鼓。



越中獅子

的場町



- ・神社名…羽咋神社
- ・世帯数…二〇八世帯（東的場町含む）
- ・団体…的場光龍会
- ・祭礼日…九月第二週日曜
- ・演目名…ヒトアシ、ギオンブリ、バンガエシ
- ・備考…町内では演目を「一番」、「二番」、「三番」と呼称している。お囃子は鉦・太鼓を使用。



越中獅子

東川原町



- ・神社名…羽咋神社
- ・世帯数…二一九世帯
- ・団体…東川原町獅子舞保存会
- ・祭礼日…九月第二週土曜・日曜
- ・演目名…ヤツブシ、ヒトアシ、フタアシ、キョウブリ、シボリ、ヨソブリ、ドウチュウブリ、ギオンブリ
- ・備考…小獅子と青年団で二日間かけて全戸渡御。お囃子は、鉦、笛、太鼓。約三〇年前に所司原から習ってきた。



加賀獅子

本町



- ・神社名…羽咋神社・山出稲荷神社
- ・世帯数…一四五世帯
- ・団体…本町町会、本町三栄会
- ・祭礼日…九月第三週土曜
- ・演技…棒、太刀、薙刀、鎖鎌
- ・備考…以前は三町だったが、現在は中央町との二町で毎年交代で「本番」（川渡しの長者川までのコース）を行う。お囃子は笛（横笛）・太鼓・三味線を使用。



加賀獅子

中央町



- ・神社名…羽咋神社
- ・世帯数…一五二世帯
- ・団体…中央町町会、中央町中恵会
- ・祭礼日…九月第三週土曜
- ・演技…棒、太刀、薙刀、鎖鎌、金看板、尺八
- ・備考…以前は三町だったが、現在は本町との二町で毎年交代で「本番」（川渡しの長者川までのコース）を行う。お囃子は笛（横笛）・太鼓・三味線を使用。



加賀獅子

旭町（休止中）



- ・神社名…羽咋神社
- ・世帯数…一四一世帯
- ・団体…旭町町会、旭町旭会
- ・祭礼日…九月第三週土曜
- ・演技…棒、太刀、薙刀、鎖鎌
- ・備考…約二五年前から休止中。現在、復活に向けて有志が活動中。



能登獅子

土橋町



- ・神社名…白山神社
- ・世帯数…三七世帯
- ・団体…土橋青壮年部
- ・祭礼日…一〇月第二週日曜
- ・演目名…サンサン、サツサイ、キョウボリ、ボンボコ
- ・備考…以前は小獅子が出て、テングの装束を身に着けていたが、現在は青年団員の法被姿。お囃子は、笛・鉦。



能登獅子

立開町



- ・神社名…若宮八幡神社
- ・世帯数…一六四世帯
- ・団体…立開町青年団
- ・祭礼日…一〇月第二週日曜
- ・演目名…サンサン、ブタカス、ホウダツ、キヨウボリ
- ・備考…花読み時、必ず一人ずつ花を読み、獅子舞を舞う。お囃子は、笛、鉦。青年団による余興が趣向を凝らしている。

能登獅子

兵庫町



- ・神社名…兵庫神社
- ・世帯数…二五二世帯
- ・団体…兵庫町青年団
- ・祭礼日…九月第三週土曜・日曜
- ・演目名…サツサイ、サンサ、ゴサン、キヨウボリ、キリマチ、アリヤサ
- ・備考…初日（宵祭）の夕方から獅子舞が練り歩く。二日目、神社に入る際に行われる神輿の練りが見どころ。神輿が鳥居をくぐるまで、獅子舞も鳥居をくぐることは許されない。お囃子は、笛、鉦（全員女子）。

能登獅子

栗生町

- ・ 神社名…日吉神社
- ・ 世帯数…一六五世帯
- ・ 団 体…栗生町青年団、栗生町会
- ・ 祭礼日…九月第一週土曜・日曜
- ・ 演目名…ゴサン、サツサイ、サンザン、キリマジ、キョウボリ、ヨイヤヨイ、ジジババ、
- ・ 備 考…前日に宵祭りがあり町民総出で余興大会を楽しむ。祭礼の夕刻、小獅子が在所中をまわり「お供提灯」の準備を触れて周る。お囃子は笛、鉦。越中から習ってきたとの説あり。



能登獅子

栗原町(休止中)

- ・ 神社名…栗原神社
- ・ 世帯数…一九世帯
- ・ 団 体…栗原町青年団
- ・ 祭礼日…一〇月九日
- ・ 演目名…サンサン、サツサイ、キョウボリ、ゴサン、キリマゼ、アリヤサ、ヤッコフリ
- ・ 備 考…お囃子は、花笠をかぶり、笛、鉦。大正九年のドラ獅子がある。



能登獅子

新保町



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…約一八一世帯
- ・団体…新保町青年団
- ・祭礼日…九月第二週土曜
- ・演目名…サツサイ、エーヨイヤサツサイ、チツシヤロ、アリヤサ、オシヤロ
- ・備考…お囃子は鉦のみ。本来獅子殺しが無い町会ではあるが、一時期だけ自己流で獅子殺しをした時期もあった。



能登獅子

深江町



- ・神社名…深江八幡神社・八坂社
- ・世帯数…一一五世帯
- ・団体…深江町青年団
- ・祭礼日…七月中旬土曜（八坂社・祇園祭）
九月最終土曜（深江八幡神社・秋季大祭）
- ・演目名…サンサン、タツ、ホウダツ、サツサイ、キオボリ、ケトボリ、チャリ、カイチヨボ、ミチアルキ
- ・備考…小獅子、中獅子、ドラ獅子がある。三〇年ほど前まで、各演目にマルマワシ（テングの声掛けを機に一八〇度まわる）と呼ばれるものがあった。周辺地域に共通演目が多く、「深江系」の源流だと思われる。



能登獅子

次場町



- ・神社名…須場神社
- ・世帯数…七〇世帯
- ・団体…次場町青年団、次場町青壮年団
- ・祭礼日…九月第週二日曜
- ・演目名…ホウダツ、サツサイ、サンサン、ケトボリ、キョウボリ、ヒメ、ミチユキ
- ・備考…深江の分村町会だけあり、より深江に近い。また、「深江と一緒に菅原に習いに行つた」との説があるが、真偽は不明。お囃子は、笛、太鼓、鉦。



能登獅子

石野町



- ・神社名…石野々神社
- ・世帯数…二二五世帯
- ・団体…石野町青壮年団
- ・祭礼日…九月第四週土曜
- ・演目名…チーリーシャ(サンサン)、カイチヨボ、オシシャ、ホウダツ、ケトボリ、シシゴロシ、ギオンブリ、イソブリ
- ・備考…近年、志賀町からの転入者から越中獅子系の演目を習い実施している。



能登獅子

三ツ屋町



- ・神社名…八幡佐太神社
- ・世帯数…五九世帯
- ・団体…三ツ屋町青壮年団
- ・祭礼日…一〇月第一週土曜
- ・演目名…チリシャシヤロ(サンサン)、オシヤロシヤ(サツサイ)、オヒヒロ(ホウダツ)、カンツキツン(キョウブリ)
- ・備考…蚊帳の中の衣装は、股引ではなく、羽咋神社系に多いスネあてと、腰に五色のタスキ。



能登獅子

吉崎町



- ・神社名…湍津姫神社
- ・世帯数…一七二世帯
- ・団体…吉崎町青年団
- ・祭礼日…一〇月第二週土曜
- ・演目名…サンサン、サツサイ、ホウダツ、カイチヨボ、マルマワシ、ヒメ、アバラ、キョウボリ、チャリ、ケトボリ
- ・備考…祭礼の締めくくりに、最大七組の獅子が舞い踊る。また、お囃子は笛のみだが、小中学生女子は皆笛をするため大人数となり、笛の音量が大きいのが特徴。



越中獅子

太田町



- ・神社名…日吉神社
- ・世帯数…六五世帯
- ・団体…太田町青年団、太田町獅子舞保存会
- ・祭礼日…一〇月第二週日曜
- ・演目名…ヨソブリ、ギオンブリ、ヤスブシ、ヒトアシ、フタアシ、キユウボリ、バイガエシ、シチゴサン(宮上がり)、ケトブリ(宿上がり)、シシゴロシ
- ・備考…大正末期～昭和初期、所司原から伝わる。ドラ獅子(高校生以上)、小獅子(中学生以上)がある。お囃子は、太鼓・鉦。最後に舞われるシシゴロシは、蠟燭で囲まれ幻想的。



能登獅子

円井町



- ・神社名…椎葉円比咩神社
- ・世帯数…六八世帯
- ・団体…円井町青年団
- ・祭礼日…一〇月第一週土曜
- ・演目名…サツサイ、カイツブ、サンサン、ホウダツ、キユウボリ、タツボリ、ケト、チャリバ
- ・備考…宮上がり前の最後の宿で行われるチャリバが見どころ。深江系の中でもより優雅さが感じられる獅子舞。お囃子は笛のみ。



能登獅子

四町



- ・神社名…白山神社
- ・世帯数…六九世帯
- ・団体…四町青年団
- ・祭礼日…一〇月第二日曜
- ・演目名…サンサン、サツサイ、ホウダツ、ケトボリ、キョウボリ、ヤツマワシ、カイチク、サンサンノヒメ、シシゴロシ
- ・備考…他の深江系にはないシシゴロシがあったり、ベツサイがいる。円井同様に優雅さが強い。お囃子は笛のみ。シシゴロシは越中から習ってきたとの説あり。テンダの口角が上がっている「笑い面」は四町のみ。



能登獅子

能登獅子

上江町（休止中）



- ・神社名…日吉神社
- ・世帯数…二〇世帯
- ・団体…上江町青年団
- ・祭礼日…一〇月上旬
- ・演目名…サンサン、ホウダツ、チーシャ、キョウボリ、ケトボリ
- ・備考…四〇年以上前から休止中。復活の見込みはない。隣接する垣内田より、四町や円井に似てると言われている。

垣内田町（休止中）



- ・神社名…八幡社
- ・世帯数…二四世帯
- ・団体…垣内田町青年団
- ・祭礼日…九月四日
- ・演目名…キョウボリ、チーシャル、ホウダツ、サツサイ、ケトボリ
- ・備考…白瀬から伝わったとの説もあるが、演目名からは深江系。また、チーシャルが白瀬のチーハロに当たるのであれば、この演目を習ったのではないかと推察される。お囃子は笛、鉦。

能登獅子

千代町



- ・ 神社名… 八幡社
- ・ 世帯数… 八二世帯
- ・ 団体… 千代町青年団
- ・ 祭礼日… 一〇月第一週土曜
- ・ 演目名… ヒッチョモサ、キョウボリ、ホウダツ、モーターリ、ケトボリ（ゴツツオクイ）
- ・ 備考… 飯山から習った説、垣内田から習った説があるが、いずれも定かではない。一度途絶えていたが三〇年前に復活する。



能登獅子

飯山町



- ・ 神社名… 飯山神社
- ・ 世帯数… 一四八世帯
- ・ 団体… 飯山町青年団
- ・ 祭礼日… 七月第四週土曜
- ・ 演目名… シチゴロサ、オンボコ、キョウブリ、オーシャ
- ・ 備考… 獅子舞の他に山車（曳山）が出される。獅子舞が飯山川を渡り、茅の輪くぐりをする夏祭りで、「お涼み祭り」として知られている。



能登獅子

宇土野町 (休止中)



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…四四世帯
- ・団体…宇土野町青年団
- ・祭礼日…四月一四日
- ・演目名…チリヒヤロ、オンボコ、バンガエシ、カイツブリ、キョウブリ、オヒヒヤロ
- ・備考…越中から習ったとの説があるが、カシラの形状や装束等から能登獅子だと思われる。ただ、バンガエシが越中獅子の演目ではあるので、どこかしらから習ってきたものと思われる。平成七年を最後に休止。



能登獅子

中川町 (休止中)



- ・神社名…當麻神社
- ・世帯数…五三世帯
- ・団体…中川町町会
- ・祭礼日…四月に行っていた。
- ・演目名…バイガエシ(キヲツケ)、チーシャロ、ボンボコボン、キョウブリ、ヨツサキ、オンシャロ、ケトボリ、シツチョモサ
- ・備考…約二〇年前に休止、復活の見込みはない。テングの烏帽子の長さが、市内最長。



能登獅子

白瀬町・上白瀬町



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…八三世帯
- ・団体…両白瀬青年団
- ・祭礼日…四月第二週土曜
- ・演目名…シシゴロサ、バイガラス、キョウブリ、カイツブス、チーハロ、オンボコ
- ・備考…サル、ベツサイ、ババ等のお道化衆がいる。お囃子は、笛、太鼓。太鼓は概ねババが担当している。



能登獅子

本江町（休止中）



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…約一〇〇世帯
- ・団体…本江町青年団
- ・祭礼日…一〇月一五日
- ・演目名…サンサン、ボウブラ、ホウダツ、キョウブリ、キリマゼ、ケトボリ、シシゴロシ
- ・備考…昭和三〇年代に休止。昭和五七年に約二〇年ぶりに復活するがそれを最後に行われていない。



能登獅子



尾長出町 (休止中)

- ・神社名…佐智社
- ・世帯数…二四世帯
- ・団体…尾長出町町会
- ・祭礼日…一〇月一二日
- ・演目名…キョウブリ、サツサイ、オンボコ、チリンヤロ
- ・備考…昭和五七年を最後に渡御は行われていない。数年前にカシラ以外の獅子舞用具一式が盗難に遭い、カシラしか残っていない。

能登獅子



尾長町 (休止中)

- ・神社名…尾長社
- ・世帯数…三七世帯
- ・団体…尾長町町会
- ・祭礼日…一〇月一二日
- ・演目名…キョウブリ、サツサイ、オンボコ、チリンヤロ
- ・備考…昭和五〇年前後から渡御を行わず神社境内で獅子舞のみ演舞していた。昭和五六年、会館新築時に渡御・獅子舞ともに行ったがこれを最後に休止。

越中獅子



千田町

- ・神社名…諏訪神社
- ・世帯数…四五世帯
- ・団体…千田町壮年団、獅子舞会
- ・祭礼日…一〇月第二日曜
- ・演目名…ヒトアシ、フタアシ、サンノアシ、ヨンノアシ、ドジブリ(ドウチュウブリ)
- ・備考…菱分町から習ったとの説が、菱分町に残る。それ以前は能登獅子を舞っており、明治四一年の能登獅子のカシラが現存している。



越中獅子

本江町若部

- ・ 神社名…住吉神社
- ・ 世帯数…五三世帯
- ・ 団体…若部町会、若部青年団
- ・ 祭礼日…四月一五日に近い土曜
- ・ 演目名…ヒトアシ、フタアシ、ヤツブシ、バイガエシ、ドウチュウ、ヤツクスシ、イソブリ、バ、シシゴロシ
- ・ 備考…お囃子は鉦、太鼓。現在「宿」は三軒あり、三軒目の宿は、祭礼の最後に神社に戻る直前の「宮上がり」と呼ばれる。



越中獅子

堀替新町（休止中）

- ・ 神社名…菅原神社
- ・ 世帯数…三〇世帯
- ・ 団体…不明
- ・ 祭礼日…四月中旬
- ・ 演目名…ドウチュウブリ（トントン）、ヒトアシ、ヨソブリ、バイガエシ、ヤツブシ、シシゴロシ
- ・ 備考…若部の獅子舞を見に行つて覚えた。（習つたわけではない）昭和五七年前後に一度休止。昭和六二年の神社境内改修を記念し復活。平成元年に再度休止。



越中獅子

本江町寺境（休止中）



- ・神社名… 水本神社
- ・世帯数… 四九世帯
- ・団体… 寺境青年団
- ・祭礼日… 四月一五日
- ・演目名… ドウチュウブリ、ヒトアシ、フタアシ、ヤツブリ、バイガエシ、ヨ（イ）ソブリ、シシゴロシ
- ・備考… 大正末期～昭和初期、千石から習ったとの説あり。昭和四〇年より休止。

越中獅子

菱分町（休止中）



- ・神社名… 菱分神社
- ・世帯数… 三二世帯
- ・団体… 菱分町町会
- ・祭礼日… 四月二〇日、九月二〇日
- ・演目名… ヒトアシ、フタアシ、ギオンブリ、バガエシ、ドウチュウブリ、イソブリ
- ・備考… 大正末期～昭和初期に寺境より習い、その後千田に伝える。昭和三八年前後より休止。

越中獅子

志々見町（休止中）



- ・神社名… 八幡社
- ・世帯数… 三〇世帯
- ・団体… 志々見町町会
- ・祭礼日… 四月一四日
- ・演目名… ヒトアシ、フタアシ、バイガエシ
- ・備考… 若部から習ったとの説あり。四〇年ほど前より休止。

越中獅子

福水町



- ・神社名…白山社
- ・世帯数…四三世帯
- ・団体…福水町壮青年団
- ・祭礼日…一〇月第二日曜
- ・演目名…ヒトアシ、フタアシ、バイガエシ、ギオンブリ、ヨソブリ、クズシ、ヤツブリ、ドウチュウボリ、サンクスシ、シシゴロシ
- ・備考…平成六年に休止したが、平成二八年に復活。氷見市日名田から習ったと伝えられているが、演目名からは、論田・熊無系に近い。お囃子は鉦、太鼓。



越中獅子

神子原町



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…一〇三世帯
- ・団体…神子原町会
- ・祭礼日…九月第三週日曜
- ・演目名…キハライ、ドウチュウ、ヒトアシ、フタアシ、ヤツブリ、カイチュウ、バイガエシ、キョウブリ、ギオンブリ、ヨソブリ、ミヤアガリ、シシコロシ、キシムブリ、ヤツコジシ
- ・備考…市内では、越中獅子の代表的存在。祭礼は壮年団の熱気により非常に盛大である。演舞も迫力がありシシゴロシは最大の見どころ。



越中獅子

千石町



- ・神社名…少彦名神社
- ・世帯数…一九世帯
- ・団体…千石町会・千石獅子保存会
- ・祭礼日…九月二二日
- ・演目名…ヒトアシ、フタアシ、バイガエシ、ドウチュウ、ヤツブシ、ゲイ、ヨソブリ、クスシ、ギオンブリ、シシゴロシ
- ・備考…氷見市日名田から習ったとの説もあり。しかし休止時期を経て、四〇～五〇年前に氷見市早借を参考に復活。シシゴロシは、神社境内に藁を敷き詰め舞台と化す。



越中獅子

菅池町



- ・神社名…諏訪社
- ・世帯数…二七世帯
- ・団体…菅池獅子舞保存会
- ・祭礼日…九月二〇日前後の祝日
- ・演目名…ヤツブシ、ヒトアシ、バイガエシ、カイチュウブリ、ギオンブリ、ドウチュウブリ、ヨソブリ、シシゴロシ
- ・備考…氷見市論田と縁組が多かったため、論田から習ったとの説あり。平成一四年一旦休止。平成二四年、移住者が増えたことにより一〇年ぶりに復活。



能登獅子

酒井町



- ・神社名…日吉神社
- ・世帯数…一九三世帯
- ・団体…酒井町町会
- ・祭礼日…四月第四週土曜
- ・演目名…ミチマワシ、ヤツマワシ、カンカン、ボンボボン、スットコドッコイ、オソマワシ、ケムリ、ハヤマワシ
- ・備考…お囃子は、笛（余喜地区唯一の縦笛）、太鼓、鉦。演目名からは関連性はないが、笛の音色やメロディは邑知系・深江系の印象が感じられる。宿では青年団による八木節の余興がある。



能登獅子

四柳町



- ・神社名…四柳神社、白山神社
- ・世帯数…一二三世帯
- ・団体…四柳町獅子舞保存会
- ・祭礼日…四月二九日
- ・演目名…ムカシ、ボンボボン、ヤツマワシ、シマワシ、ホウダツ、キヨブリ、デルシマワシ、カタナサシ、ミチマワシ、ゴサカケ、ピーヒヤラ
- ・備考…お囃子は、笛（横笛）、太鼓、鉦。余喜地区唯一のベッサイが居る。また、花読みは他地区にないアレンドが施されており笑いを誘う。夜、神社境内にて、火がついた藁束の上を、火の粉をまき散らしながら舞う獅子舞は勇壮。



能登獅子

大町



- ・神社名…御門主比古神社
- ・世帯数…一八一世帯
- ・団体…大町青年団
- ・祭礼日…五月三日
- ・演目名…ムカシ、ホウダツ、ボンノテ、スギ、ハマワシ、シシゴロシ
- ・備考…カヤを頭上で張り、腰を深く落とすのが基本姿勢であり、市内どの地域とも類似性のない珍しい獅子舞。特にカシラは龍頭と呼ばれ、独特の形状をしている。

能登獅子

下曽祢町



- ・神社名…奈鹿曾姫神社
- ・世帯数…七〇世帯
- ・団体…下曽祢町祭保存会、下曽祢町青壮年団
- ・祭礼日…四月第一週土曜
- ・演目名…ウエウエ、ウントコドッコイ、デンヤツ、デルヤツ、アツキラコ、キョウブリ、ヤツサヤツサ、ミチマワシ、シシゴロシ
- ・備考…論田熊無から習ったとの説があるが、演目名や舞の内容からすると越中との関連性は見いだせない。お囃子は笛(横笛)、鉦、太鼓。テンダの烏帽子は烏烏帽子。

能登獅子

金丸出町



- ・神社名…神明神社
- ・世帯数…一〇四世帯
- ・団体…金丸出町壮年団
- ・祭礼日…四月一六日付近の祝日
- ・演目名…キョウブリ、カンツブリ、ホウダツ、ボンボコボン、チーチャロ、バイガエシ、ヤツブリ、ムカシ、ミチマワシ、シシゴロシ
- ・備考…約一〇〇年前に志賀町上棚から教わったとの説あり。演目名からは、他所にみられるものが多い。お囃子は笛（横笛）、鉦、太鼓。テングの烏帽子は烏烏帽子。



能登獅子

鹿島路町（鹿島路地区・松尾地区）



- ・神社名…能登神社、少彦名神社
- ・世帯数…二一〇世帯
- ・団体…鹿島路獅子舞保存会
- ・祭礼日…九月第三週土曜
- ・演目名…センダイノ、シチベエサン、ヤツマワシ、ボンボコボン（以上共通演目）、キョウブリ、アツサツサ、オタニ（以上鹿島路地区）、ドンドコドン、キウリ、ソゾリキウリ（以上松尾地区）
- ・備考…一町会内に、二地区が別の獅子舞をもっている。鹿島路地区は黒塗りのカシラ、松尾地区は朱塗りのカシラを使っている。



能登獅子

千路町



- ・神社名…白鬚神社、若宮八幡宮
- ・世帯数…二〇〇世帯
- ・団体…千路町町会・千路町獅子舞太鼓保存会
- ・祭礼日…八月二〇日に近い土曜
- ・演目名…ドウチュウ、ヤツマワシ、ゴンバヤシ
(ギオンバヤシ)、キョウボリ、ブンブク
- ・備考…上中山から習ったとの説あり。市内で唯一、八月に行われる祭。お囃子は笛、鉦、太鼓。



能登獅子

能登獅子

上中山町 (休止中)



- ・神社名…中山神社
- ・世帯数…一四世帯
- ・団体…上中山町会
- ・祭礼日…不明
- ・演目名…ヤツマワシ、キョウボリ、ボンボコボン
- ・備考…復活の見込みなし。そのため、用具をすべて県立歴史博物館に寄贈したとのこと。昭和二九年を最後に休止。お囃子は笛、鉦。〔天保四癸巳年三月〕との銘が打ってある鉦があった。

柳田新保町 (休止中)



- ・神社名…新保神社
- ・世帯数…約四〇世帯
- ・団体…柳田新保町氏子会
- ・祭礼日…九月一六日（現在休止中）
- ・演目名…タチブリ、キョブリ、シチゴサン、サツサイ、シシゴロシ、キリマデ、ヒツチコ
- ・備考…明治元年に越中から伝わったとする説あり。ただし、演目名から能登獅子であると考えられる。お囃子は笛、太鼓、鉦。

能登獅子

柳田町



- ・神社名…楊田神社、猫ノ目白山神社
- ・世帯数…約一六〇世帯
- ・団体…柳田町氏子会
- ・祭礼日…九月第三週土曜
- ・演目名…ゴサン、シチゴサン、キョウブリ、サッサイブシ、シシゴロシ、ホウダツ
- ・備考…お囃子は笛、鉦、太鼓。一台の神輿に楊田神社、猫ノ目白山神社それぞれの御分霊を奉遷する珍しい在り。



能登獅子

寺家町



- ・神社名…大穴持像石神社
- ・世帯数…一六〇世帯
- ・団体…寺家町青年団
- ・祭礼日…九月第二週土日
- ・演目名…ゴサン、グンタイ、キョウブリ、シキリ
- ・備考…越中に行つて習つてきたとの説あり。また、一ノ宮、滝の獅子舞は寺家から習つていったとの説もあり。以前はベシヤラがいた。



能登獅子

一ノ宮町



- ・神社名…瀧屋神社
- ・世帯数…一六一世帯
- ・団体…一ノ宮町会、一ノ宮町青年団
- ・祭礼日…九月一八日に近い日曜
- ・演目名…キョウブリ、ヤマブシ、カタシシ、グンタイ、ゴウサン、シシキリ、シシゴロシ
- ・備考…お囃子は鉦、太鼓、ジャンジャン。以前は舁に下駄ばきだったが、現在は法被に下駄履きとしている。越中から習ったとの説がある。



能登獅子

滝町



- ・神社名…白山神社、魚取神社
- ・世帯数…一八二世帯
- ・団体…滝町青年団・滝町壮年団
- ・祭礼日…九月第三週土曜日曜
- ・演目名…シシマイ、ボコボン、キリマゼ、キョウボリ、グンタイ、ムカシ、クサカリ
- ・備考…お囃子は笛、鉦、太鼓、ジャンジャン。演目は、寺家、一ノ宮と同系列とみられるが、演舞内容は全く異なる。



能登獅子

滝谷町



- ・神社名…八幡神社
- ・世帯数…四七世帯
- ・団体…滝谷青年団
- ・祭礼日…九月第二週日曜
- ・演目名…ドンチク、ヒヤヒヤロ、キヨウブリ、ゴーサン、シチゴサン、カタガリ、オヤオヤ、シンゴロシ
- ・備考…寺家から伝わった説あり。お囃子は、笛（横笛）、鉦、ジャンジャン。全体的に、独特な演目が多い。



越中獅子

柴垣町



- ・神社名…椎葉圓比用神社
- ・世帯数…二七四世帯
- ・団体…柴垣壮年団
- ・祭礼日…九月一九日に近い土曜日曜
- ・演目名…ヒトアシ、フタアシ、ミツアシ、ギオンブリ、ヘソ、ダビエ
- ・備考…明治二〇年代に高岡市から伝わったとの説あり。ベシヤラと呼ばれるお道化衆が多数おり市内最多。毎年、祭礼日の一週間前に、ベシヤラの役処を入札形式で決める「ケンクジ」が行われている。



第三部 咋の獅子舞 百面相





■ 土橋町



■ 千里浜町



■ 羽咋神社小獅子



■ 粟生町



■ 兵庫町



■ 立開町



■ 深江町



■ 新保町



■ 粟原町



■ 三ツ屋町



■ 石野町



■ 次場町



■ 四町



■ 円井町



■ 吉崎町



■ 千代町



■ 垣内田町



■ 上江町



■ 中川町



■ 宇土野町



■ 飯山町



■ 酒井町



■ 尾長町



■ 白瀬・上白瀬町

テング百面相 ～能登獅子～



■ 下曾祢町



■ 大町



■ 四柳町



■ 柳田新保町



■ 千路町



■ 鹿島路町



■ 滝町



■ 寺家町



■ 柳田町

テング百面相 ～越中獅子～

テング百面相 ～能登獅子～



■ 的場町



■ 御坊山町



■ 滝谷町



■ 千田町



■ 太田町



■ 東川原町



■ 志々見町



■ 堀替新町



■ 本江町寺境



■ 千石町



■ 神子原町



■ 福水町



■ 柴垣町



■ 菅池町



■ 土橋町



■ 千里浜町



■ 羽咋神社小獅子



■ 粟原町



■ 粟生町



■ 兵庫町



■ 次場町



■ 深江町



■ 新保町



■ 吉崎町



■ 三ツ屋町



■ 石野町



■ 上江町



■ 四町



■ 円井町



■ 飯山町



■ 千代町



■ 垣内田町



■ 白瀬・上白瀬町



■ 中川町



■ 宇土野町



■ 酒井町



■ 尾長出町



■ 尾長町



■ 下曾祢町



■ 大町



■ 四柳町



■ 千路町



■ 鹿島路町



■ 金丸出町



■ 寺家町



■ 一ノ宮町



■ 柳田町

カシラ百面相 ～越中獅子～



■ 御坊山町



■ 滝谷町



■ 滝町

カシラ百面相 ～能登獅子～



■ 太田町



■ 東川原町



■ 的場町



■ 菱分町



■ 堀替新町



■ 千田町



■ 神子原町



■ 福水町



■ 志々見町



■ 柴垣町



■ 菅池町



■ 千石町



■ 中央町



■ 本町



白瀬・上白瀬町 ババ



白瀬・上白瀬町 サル



白瀬・上白瀬町 ベッサイ



四町 ベッサイ



中川町 ベッサイ



本江町寺境 ベッサイ



神子原町 ジジ



神子原町 ババ



千田町 ベッサイ



滝谷町 ベシヤラ



滝谷町 ベシヤラ



柴垣町 ハナカケ



柴垣町 ニコニコ



柴垣町 ハンニヤ



柴垣町 ジョウベシヤラ



柴垣町 ジョウベシヤラ



柴垣町 ジョウベシヤラ
「昭和三十年」(1955)



柴垣町 ダンゴバナ
「文久元年」(1861)



柴垣町 カラス
「明治■辰九月」



柴垣町 カラス
「大正二年丑九月」(1913)

特第四 論部



羽咋獅子舞の多様性について

はくい獅子舞保存活性化実行委員会 諏訪 雄士

第一章 はじめに

このたび、この調査報告書を作成するにあたり、非常に大切な部分を担当させていただく事となり、光栄である反面、不安もありました。私自身はこの実行委員会のメンバーとなる前から、個人的に獅子舞を調査・研究してきましたが、あくまでも素人レベルに過ぎません。この文章も、一人の獅子舞好きの一般人が書いたモノであります。正しい正しくないは別として、「このような考え方もあるのか」という程度に読んでいただけたら幸いですし、「なるほど」と言っていただける部分がありましたら、大変有り難いです。

第二章 序論

羽咋市は、能登半島の付け根に位置し能登の玄関口であり、さらに能登、加賀、越中の交差する場所でもあります。そのため、羽咋市には能登獅子、加賀獅子、越中獅子の三系統の獅子舞が見られる事は、この調査報告書の先に述べられている通りである。

加賀獅子は、明治三〇年に島出町の料亭に出入りしていた、金沢の料理人から伝わり、羽咋市街の三地区でのみ見られる。この辺りでは「祇園囃子」と呼ばれている。

越中獅子は、隣接する富山県氷見市より伝わり、現在の国道四一五号線沿いの山間部から平野部の数地区に伝わった。これ

らは明治以降の伝承と考えられ、現在越中獅子を舞っている地区でも以前は能登獅子を舞っていた地区が多く、羽咋市においては加賀獅子同様新しく入ってきた系統である。

能登獅子は、在地型の獅子舞で、羽咋市、志賀町、宝達志水町（旧志雄町・旧押水町）をはじめ、中能登町（旧鹿西町・旧鹿島町・旧鳥屋町）、七尾市、穴水町等、系統は異なるが、能登一円に分布している。先述の加賀獅子・越中獅子を明治時代以降に習い、導入した集落を除くと旧来の在地で伝えられてきた獅子舞として位置づけることができる。

それでは、古くからあったとされる羽咋市の「能登獅子」とは、どのようなモノで、どのように発展してきたのであろうか？

今回の調査研究事業で、羽咋市内の在地型の能登獅子について聞き取り調査をしたことにより、その演目名や演舞のスタイルから大まかに八つのグループに分類できる事が見えてきた。

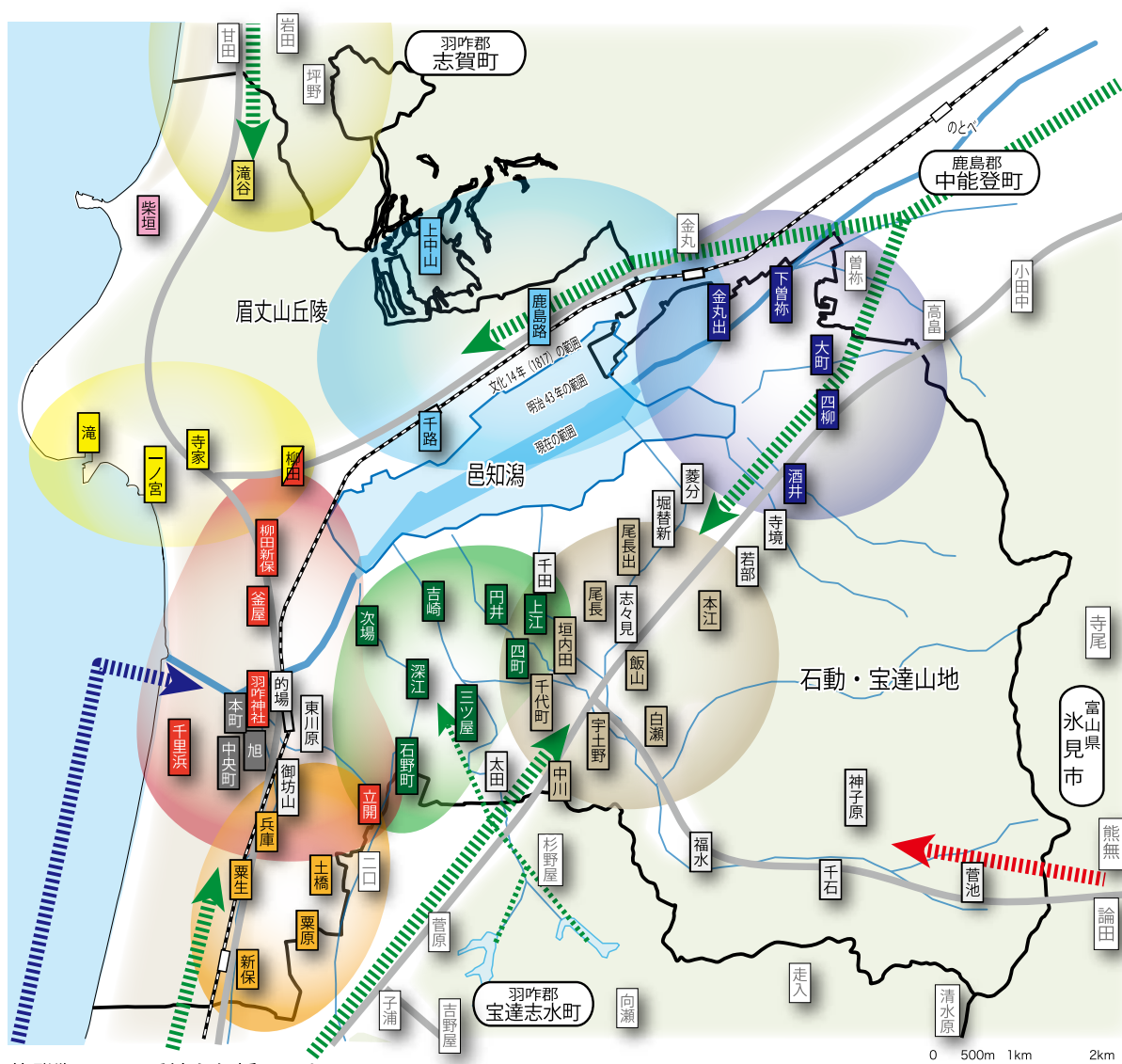
第三章 能登獅子の八つのグループ

一、羽咋神社系（羽咋神社小獅子、千里浜町、釜屋町）

旧羽咋町に該当する羽咋市中心部の市街地にある羽咋神社の小獅子を中心に、千里浜、釜屋にかけて分布。テンポが非常に速く、腕を上げて蚊帳を上部に張り、時には全体を大きく振る。囃子方は、絃着物に下駄履き、頭に花笠姿で、太鼓、笛、鉦を用いる。鉦は、ほぼ打音が中心で、凹面の摺り音が無い演目もある。羽咋神社小獅子の太鼓は、平太鼓を用いる。

二、粟ノ保系（粟生町、兵庫町、新保町、土橋町、立開町、栗原町）

市内南西部の粟ノ保地区を中心に伝わる。演舞のリズムは早く、羽咋神社系の流れを組みながらも南隣の宝達志水町の浜側集落との共通性も見られる。演目では「サッサイ」や「サンサン」が多く、囃子は笛と鉦が中心。



能登獅子の8系統と伝播ルート

加賀獅子伝播ルート	浜側	羽咋神社系	粟ノ保系	一ノ宮系	上甘田系
越中獅子伝播ルート	里方～山手	深江系	邑知系		
能登獅子伝播ルート	潟北～潟東	眉丈系	余喜系		

三、深江系（深江町、石野町、三ツ屋町、吉崎町、次場町、円井町、四町）

市内中央から東部にかけての富永地区と中邑知地区の一部に見られる。羽咋神社系、粟ノ保系との共通性もありながら、「ケトブリ」、「チャリバ」、「〇〇のヒメ」などの演目が特徴。宝達志水町の山側の集落との共通性が見られる。囃子は、基本的に笛のみで、演目によつては鉦・太鼓も入る。

四、邑知系（白瀬町、飯山町、宇土野町、中川町、垣内田町、千代町）

市内東部の白瀬や飯山を中心に见られる。宝達志水町の山間部や深江系、余喜系、さらに越中系と共通する演目もあり、「ケトブリ」、「チーシャロ」、「ホウダツ」が多い。囃子は、笛のみの地区が多いが、中川は太鼓、笛、鉦が入り、隣の宝達志水町杉野屋や山間部の向瀬の影響が強いと言われる。

五、余喜系（酒井町、四柳町、大町、下曾祢町、金丸出町）

市内東部の中能登町（旧鹿西町）に接する地域で、余喜地区と呼ばれる。囃子は、太鼓、笛、鉦が入り、笛は横笛を使用するのが一般的。天狗に対して獅子が左回りに演舞する演目が多く見られる。演目では「ムカシ」、「ミチマワシ」が多い。大町は独特の獅子舞で類似性が無く、その獅子頭は龍頭型が特徴的で、その独特の形状は他地区にはない。大町以外では、上記の傾向がよく似ている。

六、眉丈系（鹿島路町、千路町、上中山町）

市域北部の眉丈山丘陵に沿って展開する集落（鹿島路、千路、上中山）で見られる。演目「ヤツマワシ」、「ボンボコ（千路や上中山のブンブクも同一と考えられる）」や、囃子が太鼓、笛、鉦で共通し、余喜系統との類似も見える。同じ眉丈山丘陵に沿う集落でも、柳田町にはこの傾向は見られず、どちらかというと、一ノ宮系に近いと思われる。

七、一ノ宮系（一ノ宮町、寺家町、滝町）

内西北部の能登国一宮気多大社周辺の地

区（滝・一ノ宮・寺家）で見られる。演目では「ゴサン」、「グンタイ」等が特徴。囃子では、鳴り物にジャンジャンとよばれるシンバルを用いるのが特徴。

八、上甘田系（滝谷町）

市内の西北部でも志賀町に接する地域で、旧来は志賀町に属していた。獅子舞の従者のベシヤラが特徴的。囃子では、一ノ宮系と同じく鳴り物にジャンジャン（シンバル）を用いる。「ドンチク」、「ヒヤヒヤロ」など、北接する志賀町との演目の共通性が見られる。

以上のグループは、羽咋市の旧行政区域や隣接市町村と少なからず関係していると考えられる。さらに細かくみれば、隣接グループ同士共通する部分があったり、同じグループ内でも地区ごとに細かな違いが見られたりするため、明確に分けられるわけではなく傾向を抽出したものであり、一概には言えず、あくまで目安である。

これは、演目によって伝承元（習った地区）が違う場合が往々にあるように思う。

すなわち、複数グループの混成・ハイブリットという場合もあるわけである。さらに、同種異称（同じ演舞でも呼び名が違う）や異種同称（違う演舞なのに同じ呼び名）の演目も存在する。同種異称、異種同称については、今回の調査では全地区の全演目まで精査できなかったが、今後各地区の演目の一つ一つの類似性を比較・検証していくことで、演目の種類は幾分か絞られていくと思う。

しかしながら、今回の調査で演目の聞き取りがかなり正確に把握でき、その一覧を「演目マトリックス」として整理できたことは重要な成果であり、演目名から一定の傾向を抽出することが可能と考える。以下には、演目からみた傾向分析を試みてみたいと思う。

第三章 六つの往来

いま述べた演目からみた八つのグループの傾向を前提に、実際に自分の目で各地区の獅子舞を見て感じたのは、羽咋の獅子舞文化は、その位置や近隣市町村と接する人々の往来ルートにより、「六つの往来」

と深く関わっていると考えられるのである。そして、このルートを通じて伝わった獅子舞の演目が、永い年月をかけて羽咋の中でも混ざりあい、進化・発展を遂げたことで、今日の羽咋獅子舞文化の多様性に繋がったのではないだろうかと考えている。

六つの往来とは

- 一、金沢から羽咋ルート
- 二、富山県氷見市から氷見街道のルート
- 三、宝達志水町から羽咋にかけての日本海側の浜側街道ルート
- 四、宝達志水町から羽咋にかけての山側街道ルート
- 五、志賀町から羽咋にかけての日本海側の浜側街道ルート
- 六、邑知潟地溝帯沿いの往来（東往来…余喜地区・中能登町、西往来…鹿島路地区・中能登町）ルート

この報告書において、私に課せられた使命は、今回の調査で見えてきた羽咋市

の在地型の能登獅子系に見える「八つの系統」とその伝承経路と深く関わる「六つの往来」の関係を、演目調査結果や地域の歴史等を参考にしながら精査し、さらに羽咋市内全域の能登獅子系に共通する唯一の演目と言っている「キョウブリ」の一考察も交え、羽咋の獅子舞文化の多様性を探ることであり、その歴史的価値を再発見したいと考えた次第である。

第四章 本論

「八つのグループ」×「六つの往来」

獅子舞は、全国的に見ても最も盛んな民俗芸能であると言われている。石川県においては、昭和六一年発行の『石川県の獅子舞・緊急調査報告書』によると、県内全域で約九九〇の集落に約一一〇〇組の獅子舞がある、または過去にあったとしている。能登地方においても約四〇〇の集落に獅子舞がある、または過去にあったとしている。隣の富山県では、昨年富山県内のケーブルテレビ数社が調査したところによると、現在でも約八四〇の獅子舞が伝承されている

だという。以前は一二〇〇程あったのではないかとされており、その数は全国一位とも言われる。石川県は富山県に比べれば少ないが、全国的に見れば、獅子舞の盛んな地域と言えるだろう。また、能登地方では、獅子舞は珠洲市や輪島市などの奥能登地域には少なく、羽咋市を中心とする口能登地域に多い傾向がある。これは、奥能登地域を象徴する祭礼文化である「キリコ・奉燈文化」と無関係ではないだろう。奥能登地域が、祭礼においてキリコ・奉燈を重視する一方で、口能登地域では祭礼と言えれば神輿渡御に伴う獅子舞が中心なのである。

羽咋市では、約六〇の地区（町会）に獅子舞があり、現在も約四〇地区（町会）で行われている。市内ほとんどの地区に獅子舞がある（あった）ことになり、獅子舞の盛んな地域と言えるだろう。羽咋市も含め、その近隣市町では、獅子舞は豊作・豊漁を祈念・感謝したり、地区の悪魔払いとしての意味合いで、春季・秋季祭礼の神輿渡御に伴い演舞されたりするのが一般的である。先でも述べたが、羽咋の獅子舞は大きく

分けて、加賀・越中・能登の三つの系統があり、さらに能登獅子系では八つのグループ、その背景には外部とつながる六つの往来と羽咋内部での混合が見える。永い年月をかけて、人々が交流し、行ったり来たり、出たり入ったりが繰り返され、その地域独自の文化が形成されて、現在に至るわけだが、こうした文化の形成は、やはり人の動きによるものが大きい。

私がこれまでに獅子舞を聞き取り調査してきて、獅子舞を他地区から導入し、習った集落間の関係性として多くみられたのは以下のケースである。

- ・地区が近いなど位置関係によるもの
- ・婚礼や縁組によるもの
- ・商売や仕事の関係（行商人や特産物の取引、木挽き仕事、溜池修理の人夫等）
- ・同じ神社の氏子や同じ宮司の兼務によるもの

これらのケースも踏まえながら、演目から見た傾向とともに、前述の六つの往来ごとに考えてみることにしよう。

へ加賀獅子の伝承ルートへ

一・金沢から羽咋ルート

羽咋市の獅子舞において、加賀（金沢）獅子系があることは非常に興味深い。羽咋神社の氏子町会である本町・中央町・旭町に伝承されており、石川県内の加賀（金沢）獅子の北限と言える。羽咋では「祇園囃子」と呼ばれ、市街地の三町会（本町・中央町・旭町）で伝承されているが、これは明治三〇年に島出町の料亭に出入りしていた金沢の料理人が教えたといい、加賀（金沢）獅子の特徴をそのまま伝承していることが特徴である。

加賀（金沢）獅子では、獅子に対する演舞者は一般的に「棒振り」と呼ばれるが、その型（流派）がいくつも存在する。有名なものは、浅野川以北に多い「土方流」と犀川以南に多い「半兵衛流」であるが、羽咋の祇園囃子が、どの流派に該当するかは不明である。『石川県の獅子舞』緊急調査報告書』にまとめられている金沢市周辺の加賀獅子の調査成果をもとに、羽咋市本町と曲目・囃子が似た地区はないだろうか

と探したが、羽咋市本町に伝えられる「宮参り」という囃子は、金沢市では五郎島町等五町会で見られ、「元禄花見踊」は、白山市松任の市街地周辺で見られた。金沢市でよく聞く囃子の「ノエ節」、「コンピラフネフネ」が、羽咋祇園囃子にもあるのかなど、囃子のメロディーを詳細に検証し、先ほどの棒振り流派とともに今後調査していく必要がある。羽咋祇園囃子が他地区に伝えられたという話は今のところなく、独自の発展を経て現在に至っていると考えられる。

へ越中獅子（氷見獅子）の伝承ルートへ

二、氷見から氷見・菅池街道ルート

羽咋と富山県氷見市を結ぶ往来は、現在では、国道四一五号線が主であるが、古くは羽咋市千石く菅池を通って、峠を越えて氷見市熊無、論田に抜ける「菅池往来」が中心であった。『富山県歴史の五街道（塩照夫著）』によると、江戸時代の商人は、古代以来の氷見から能登への主要街道である「白ヶ峰往来」により宝達志水町の子浦

宿場へ出るルートを通らずに、いわゆる「宿抜け」道として、羽咋の飯山宿場に出る「菅池往来」を利用しており、これが村々の貨幣収入増加を助け、地域分業による生産物の架け橋となったと書かれている。

羽咋市菅池では、「藤箕」が特産物であった。『羽咋物語三・羽咋市商工会発行』によると、菅池町の藤箕は、元禄七年（一六九四）の「農耕之外所有作有之村々寄帳」に初めて紹介されたことあり、安永七年（一七七八）の「羽咋・鹿島郡産物之様子書上申帳」では、加賀・越前・越中に売られたことが記されている。菅池の箕作りは明治・大正が最盛期であったようだ。

この「藤箕作り」は、羽咋市菅池町と街道で接する氷見市論田・熊無地区と一体的に盛んに行われていたものである。氷見市立博物館発行の『氷見の手仕事』によると、元禄四年（一六九二）「農隙所作村々寄帳」に「一、箕仕申候（中略）論田村」という記録がある。氷見市論田や熊無の獅子舞が、各地に広まったのは、「藤箕」の行商や原料の藤の採取に各地へ

出かけたことによるものと言われている。

このように往来（道）で繋がり、特産物の関係や、縁組もあって、論田や熊無の獅子舞が羽咋市の中山間地域である菅池・神子原・千石へと伝わってきたのは、自然な流れであろう。富山県氷見市に接する羽咋市のこれら集落で氷見市の論田・熊無系統の獅子舞が行われるようになったのは、明治時代に入ってからと言われる。では、これらの地域では、それ以前に獅子舞がなかったのかというと、そうではない。神子原で保存されている江戸後期から末期とされている古い獅子頭の形状が能登獅子系の特徴をよく残しており、氷見獅子系を習う以前は、羽咋市の平野部の集落と同じく在地型の能登獅子系があったと考えられる。しかし、それを知る人はもうおらず、聞き取りも不可能となっている。

羽咋市で、越中獅子系の集落は、休止しているものも含め一五地区（町会）が確認できるが、明治二〇年代に出稼ぎ先の富山県高岡市から習ったと伝わる柴垣町と、昭和期に宝達志水町所司原から習った太田町（昭和初期）、東川原町（昭和六三年頃）以



論田熊無系の赤カヤ 千田町

外は、幾つかの地区を経由していても、すべて論田・熊無地区の獅子舞にたどり着く。その影響は、獅子の蚊帳に論田・熊無地区に特徴的な緋色（赤一色）ガヤが多いことから伺える。殊に、千田↓菱分↓寺境↓千石町↓宝達志水町清水原↓氷見市論田と辿ることができ、また、志々見町↓若部↓氷見市論田と伝承ルート廻ることが、今回の調査で新たに分かった。

羽咋市の獅子舞演目において興味深いのは、能登獅子の地区でも、「キョウブリ」を始め、「カイチョウボ」、「ムカシ」、「ホウダツ」、「サンサン」、「グンタイ」、「キリ

マゼ」、「七五三」等、氷見獅子系と共通する演目名が存在する点だ。とくに、「ムカシ」、「ホウダツ」、「サンサン」、「グンタイ」は、氷見市中心部の市街地周辺のいわゆる町方に多くみられる演目で、羽咋市と氷見市街地との行き来が盛んだったようにも考えられる。羽咋市に見られる「カイチョウボ」や「カイツブリ」は、氷見で言う「カイチュウブリ」（市街地周辺ではイリガシとも呼ぶ）と同じ呼称と考えられる。しかし、これらの演目については、氷見から習ったと言い伝えている地区が羽咋市内にあまりにも少なく、習った地区の具体的地名も伝わっておらず、これらの演目全ての発祥が氷見であるとは言い切れないと考える。

また、「キリマゼ（キリマジ）」は、氷見では伝承地区が少なく氷見市十二町坂津、藪田、白川、土倉、赤毛に見られる程度である。これらのなかには、獅子舞を能登から習ったと伝えている地区もあるが、能登のどこから習ったのかはわからない。「キリマゼ」は「切り混ぜ」の意味と考えられ、実際に二種類以上の演目を繋いだメドレー演目である。ちなみに、この二種類を三種

類に増やして作られたのが、氷見の「サンクズシ」ではないかと、個人的に考えている。

へ能登獅子の伝承ルート①▽

三・宝達志水町から羽咋にかけての日本海側の浜側街道ルート

羽咋市の能登獅子系の獅子舞演目のなかでも「サツサイ」「サンサン」は、「ホウダツ」と並び、二・三番目に多い演目で、伝承されている地区も似通っており、主に羽



サツサイ小獅子 宝達志水町今浜
撮影：渋谷利雄

昨神社系、粟ノ保系、深江系に多くみられ、市内の浜側沿いの南西部から中央部にかけて分布する。

特に「サッサイ」は、羽昨神社系の中心市街地から粟生、新保、隣接する宝達志水町柳瀬や出浜から宿や米出といった、浜沿いの地区に見られる傾向である。宝達志水町やさらに南のかほく市の浜側集落では、子供らによる獅子組を小獅子と呼んでおり、その獅子舞自体を「サッサイ」と呼ぶなど、子供獅子の代名詞になっている。この能登の海浜部の浜側の集落に顕著な「サッサイ獅子」は、宝達志水町やかほく市、さらに南の津幡町まで及んでいる。

例として、宝達志水町今浜では、子供らによる小獅子を「サッサイ獅子」と呼んでおり、演目に「サッサイ」はないものの、演舞中の囃子言葉に「サッサイ」が入る。

このほか、浜側ではない地区だが、宝達志水町子浦でも、今では廃れて演舞されなくなった演目の中に「サッサイ」があるという。宝達志水町子浦は、かつての宿場町で、人が集まる往来の拠点であった。子浦には久保町と荒屋・新川の二組の獅子舞があり、

子供らによる小獅子は能登獅子系、青年団らによる大獅子は越中（氷見）獅子系を舞い、従来の能登獅子の小獅子に加え、大獅子として氷見獅子を導入していることがわかつている。久保町の子供獅子舞では、かつて「キョウブリのサッサイ」と呼ばれていた演目があったという。また、宝達志水町子浦、柳瀬、出浜と羽昨市の粟生、新保は、同じ子浦出雲神社の氏子（宮司・志尾家）であり、昔から集落間の縁組関係も多く見られるそうである。

囃子方は、柳瀬、出浜では鉦と笛を用いるが、子浦や吉野屋は笛のみ、菅原では太鼓、笛、鉦が入り、かつての行政区域（柳瀬、出浜は樋川地区、子浦、吉野屋は子浦地区、菅原は南邑知地区）で違いが見られる。

以上に述べた海岸部につづく集落同士の交流と同じ神主の神社氏子としての関係もあり、「サッサイ」を共有するグループが見えてきており、浜側の伝承ルートを想定することができる。

へ能登獅子の伝承ルート②▽

四、宝達志水町から羽昨にかけての山側街道ルート

羽昨で深江系と呼んでいる地区の数地区でのみ「チャリバ」（地区によっては「チャリ」、「チャラバ」ともいう）という演目がある。この演目の特徴は、一人の天狗を真ん中に両サイドから二組の獅子が挟む形となる演目で、祭礼の最後の宮入前の宿（やど）で演舞したり、宮入り後の神社境内で最後に舞ったりする演目であることから、これを越中獅子で言う「獅子殺し」と位置づけている。

羽昨市と隣接する宝達志水町杉野屋や向瀬でも同様の演目が確認でき、杉野屋では「チャナバ」と呼ばれるが、現在舞われていない。向瀬では、祭礼の獅子舞自体が三〇数年前から休止されたまま途絶えている状態であるが、聞き取りによると「チャルバ」と呼び、祭礼のはじめに神輿が神社から出る（出御）際に、神社の鳥居前で舞われたそうで、演目の形態としては、深江系のものと似ているようだ。なお、向瀬で



二頭立ちのチャリ 深江町

は神社へ神輿が戻る宮入り（還御）の際に「チャルバ」とよく似た「ホンブリ」という演目を舞い、これを別名「獅子殺し」と呼んでいたそうである。この「チャリバ」の分布を見るだけでも、宝達志水町から羽咋市富中・邑知地区の一部にかけて共有するグループと山側から低地にかけての伝承ルートが浮かび上がってくる。

ちなみに、宝達志水町向瀬の獅子舞は、近隣でも永い伝統を誇ると言われている。『志雄町史』によると、「子浦出雲神社の神

主志尾家二九代宮司、志尾由作氏の語るところによれば、蓮行院大徳が、一七四四年（延享元年）五月に正大先達の位を受けたとき、慶祝のため、附近二四力村から獅子舞を繰り出し、それぞれ得意の演技で興をわかせたが、そのとき向瀬の獅子舞が一番良かったという。」という記述が見える。

子浦出雲神社はかつて、真言系山伏の「明楽寺」であつたとされる。山伏の最高位である正大先達になった慶祝行事に「附近二四力村から獅子舞を繰り出」されたとする一説が興味深い。江戸時代中期に、宿場町として知られた子浦村の附近の二四力村に獅子舞があつたならば、近隣の羽咋市でも獅子舞が行われていたとしても何ら不思議ではなく、この二四力村の中に羽咋の村もあつた可能性も高く、この話の裏付け資料（古文書等）が確認できれば、私達の調査においても重要な資料となるであろう。次に、演目「ケトブリ（ケトボリ）」についても触れておきたい。この演目は、獅子舞が招待の家に入るときや獅子舞が神社に戻る還御の鳥居をくぐる時に舞われるもの



ケトボリの盛り砂 円井町

で、とくに前者では、舞いながら家の敷地内に入り、盛り砂の頂部に杉の葉を刺したもの蹴飛ばして招待家に入り、それに続いて神輿が入ることから、露払いの演舞と位置づけられる演目である。「ケトブリ」は「蹴り飛ばす振り」からきているのではないかと考えている。羽咋市内では、「ケトブリ」は深江系、邑知系で見られない演目である。周囲では、宝達志水町の山間部にある新宮地区でも同じような「ケトブ

リ」が確認できた。昭和三〇年頃まで能登獅子系を舞っていた、宝達志水町散田や石坂でも同様の話を聞くことができたし、向瀬では同内容の演目を「ツジブリ」や「スブリ」と呼んでいたそうである。

「チャリバ」、「ケトブリ」の他にも、「チイシャロ」、「カイチョウボ」、「七五三」、「ボンボコボン」等、宝達志水町でも羽咋と隣接する旧志雄町のさらに旧南邑知地区（杉野屋、菅原、二口）、や北志雄地区（特に向瀬）、そして南志雄地区（新宮等）といった、現在の国道一五九号線（東往来）沿いから山間部の地区で舞われている（舞われていた）演目と、羽咋の深江系、邑知系、余喜系の一部とが共通性が高いことがわかった。調べていくと、宝達志水町杉野屋と隣の羽咋市中川は宝達志水町向瀬の獅子舞を習った（全てではないようだ）という。この背景には、江戸時代の享保年間に杉野屋、菅原に中橋久左衛門が築いた大きな堤（溜池）があるが、その溜池の水を利用して農業をしてきた用水の水系による交流も獅子舞文化の形成と無関係ではないように

思われる。この溜池の水系は、最上部に位置する宝達志水杉野屋から、羽咋市太田、中川、千代町、垣内田、上江、千田、円井、吉崎、深江、四町をはじめとする一一カ村に送られていたのである。

へ能登獅子の伝承ルート③

五、志賀町から羽咋にかけての日本海側の浜側街道ルート

かつて羽咋市柴垣、滝谷と志賀町甘田は同じ上甘田村であった。このうち柴垣・滝谷は、羽咋市が市制施行した昭和三三年に編入されたため、羽咋市のなかでも生活文化圏としては志賀町に近い。これを裏付けるように、志賀町甘田の北隣の大島の獅子舞は、羽咋市柴垣から習ったものといい、さらに大島から隣の長沢へ伝わっている。また、甘田の獅子舞は、滝谷から習ったものだという（その後二所宮からも習った話もある）。

この旧上甘田村の特徴的なものとして「ベシヤラ」がある。ベシヤラとは、神輿



柴垣町の大獅子と神輿



白瀬町のサルとババ



柴垣町のニコニコ

に随行する仮面従者で、いわゆる「おどけ者」と位置付けられるが、羽咋市や隣の中能登町では、主に「ベッサイ」と呼ばれている。ベシヤラと呼ぶのは、旧上

甘田村地域の独特の呼び名である。羽咋市柴垣では、その人数が多いのが特徴である。柴垣から獅子舞を習った志賀町大島では「ベシヤラ」ではなく「メン」と呼ぶようである。志賀町では他に「シャシャロ」、「シャンガン」、「ベッサイ」と呼ぶ地域もある。こうしたおどけ者は、神輿を先導する子供らの小獅子とは別の「大獅子」とセットであったと伝承する地区もある。この地区の大獅子とは、神輿に付属する「舞わない獅子」で、カシラが非常に大きく、主に青年団の若者層がこれを担当する。この大獅子は、羽咋市の羽咋神社氏子町会などでみられる「ドラ獅子」という神輿に付属するだけの獅子頭があるが、それと同じ意味合いを持つものと考えられ、神輿に付き添い、神輿の先導をしたり、行く手を妨害したりする。これら羽咋市内の「ドラジシ」とよ

ばれる大型の獅子頭は、その形状は獅子というより、龍頭に近い古式をのこしており、旧来からの神輿渡御の伝統を伝えている。

このことから、志賀町の「大獅子」や羽咋の「ドラ獅子」は、いわゆる「行道獅子」と同じような意味合いがあると考えられるのではないだろうか。この神輿に付き添う仮面従者である「ベッサイ」「ベシヤラ」「シャシャロ」などは、渡御行列の道案内を務める役割の七尾市中島にみられる「猿田彦神」を意味するモノではないかとも思われる。志賀町では、こうした大獅子の渡御文化は、江戸中期より以前からあったとされ、古い獅子頭が各集落の蔵に残されているという。古い道具では、志賀町二所宮には享保一八年（一七三三）の銘が入った鉦があるといい、この地域の獅子舞文化の歴史を感じさせる。この大獅子・ドラジシ文化が現在でも志賀町と羽咋市にかけての海浜部に見られることは非常に興味深く、海側ルート交流もあったことが想定される。

へ能登獅子の伝承ルート④▽

六、邑知瀉地溝帯沿いの往来（東往来…余喜地区↪中能登町、西往来…鹿島路地区↪中能登町）ルート

かつて羽咋市余喜地区（大町、四柳、酒井、下曾祢、金丸出）と鹿島路地区は現在の中能登町の旧鹿島郡であった。昭和三年の羽咋市の市制施行の際に、両地区は、羽咋市へ編入されたため、これらの地区では、旧来より現在の中能登町地域との関係が深く、日常的な生活圏意識や縁組の面でも交流が多く、獅子舞についてもその傾向がみられる。中能登町では、寺社の新改築、御開帳等の慶事、公的慶祝の場合にのみ曳き出される、「曳山」があるのも特徴であるが、羽咋市の余喜・鹿島路両地区でも、かつては曳山が出されており、同様の文化圏であったことがうかがわれる。

羽咋市の能登獅子系のなかでも余喜グループと眉山系グループに分類されるものは、演目名や囃子でも共通する部分がいくつか見られる。演目では、「ヤツマワ

シ」や「ボンボコボン」(千路・上中山ではブンブク)が多く共通性がある。囃子では、構成はいずれも太鼓、笛、鉦を使用するが、とくに余喜系では主に横笛を用いる点が異なる。余喜系では、「ムカシ」「ミチマワシ」を伝承する地区が多いが、「ムカシ」は、基本的な演目、「ミチマワシ」は道中等で舞う演目としている。これらについては、隣の中能登町でもいくつか共通する部分があり、特に羽咋市に接する中能登町御祖地区では、その傾向が顕著である。

同地区の曾祢は「上曾祢」とも呼ばれ、羽咋市下曾祢とは位置も隣同士、神社は兄妹の神様を祀っており、上と下で旧来は一体的な集落を成していたが、先述の昭和三十三年の編入により、下曾祢が羽咋市となった経緯がある。石川県教育委員会による獅子舞調査では、下曾祢の獅子舞は上曾祢から習ったと、当時の調査書に記載があり、実際に両者を見比べても、共通する演目が複数あり、動きもよく似ている。また、同地区の高畠では、羽咋市余喜地区と共通する「ミチマワシ」が伝わる。主に渡御道中や

神社へ入る際に舞われる演目で、羽咋市余喜地区のミチマワシと囃子は違うが、同じ意味を持つものとして共通性がある。

高畠では、東西二地区に分かれ、二組の獅子があり、碁石ヶ峰を隔てて接する氷見市懸札、寺尾地区からそれぞれ越中獅子が伝わった集落である。この「ミチマワシ」は、越中獅子の演目にはないモノであり、これを習い導入する以前に余喜地区と同じ能登獅子系統の獅子舞があった名残なのではないかと考えられる。同様に、同地区の小田中では、「一時期獅子舞の演舞の型をもとに戻すため、余喜地区から習ったがうまくいかず、結局、氷見市寺尾の獅子舞を習った」という記述が『鹿島町史』に見える。この記述から、小田中集落では、かつて羽咋市余喜地区と同系統の獅子舞が行われていたと推察できるのである。

中能登町では、ほとんどの地区で氷見からの越中獅子が伝わっているが、これは明治時代以降のことと考えられ、それ以前に在地型の能登獅子系の獅子舞が

あったという地区が多くみられる。なかには、以前からの従来型の演目に加えて、その後に導入した氷見から伝わった演目が混在する地区も多く見られる。

中能登町の旧鹿島町の小竹では、かつて地区の七尾側を通称「タカデ」、羽咋側を「ウラデ」と呼び、それぞれの神社に曳山、獅子舞があった。「タカデ」の獅子舞は、越中(氷見)獅子系であったが、「ウラデ」



大町の能登獅子

の獅子舞はタカデとは別系統の獅子舞であった。これもまた、従来の在地型の演目であったと考えられ、その演舞の特徴として、獅子が天狗に向かって、左回りに半周して舞い、また半周して戻って舞う。これは、羽咋市余喜地区の演舞と共通する内容である。

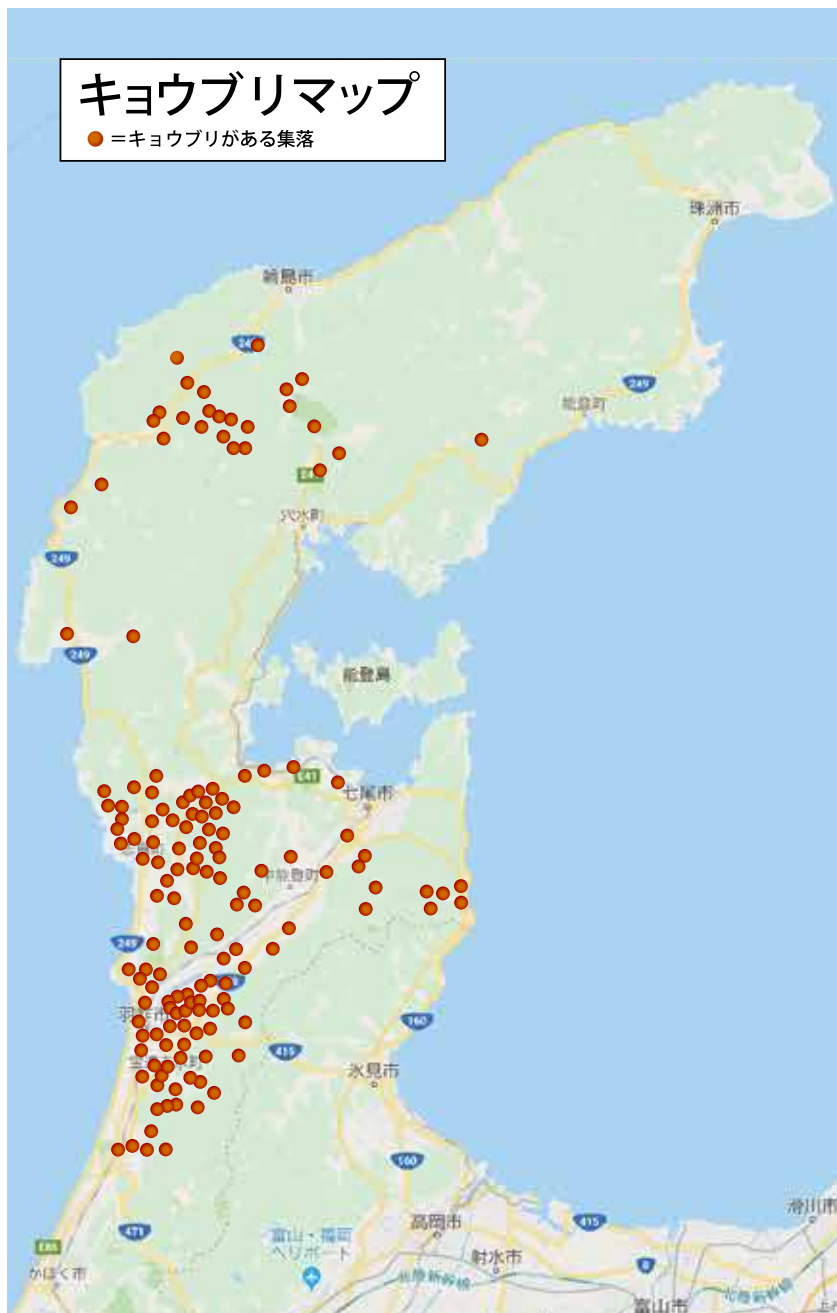
ただし、余喜地区の五集落のなかで、大町だけは、他の集落とは異質の獅子舞で独自性が高く、独特の内容を有している。例えば、獅子頭の形状は龍頭型とも馬頭型とも言われており、周辺集落には類似例がない。獅子に入るカヤも、腕を上げて上のほうでカヤを張って演舞するが、余喜地区の他の集落では、腕を下におろしてカヤを下で振って演舞する形態である。さらに、三人のカヤが入って踊るにもかかわらず、その長さは非常に短く、他の能登獅子とは異なり独特である。演目をみても、「ボンノテ」は、羽咋市では大町だけに伝わる。ちなみに、これは「棒の手」が語源とみられ、氷見市でも高岡市の二上・守山系の影響を受けているとされている地区では、演目に「ボウノテ」が見られる。大町の獅子

舞の伝承経路は不明であり、独自に発生した可能性もあり、これらとの関係はわからない。また、大町から他集落へ教えたという話も聞かれないことから、非常に独自性の高い演舞を熱心に継承する集落である。

第五章 キョウブリ論

演目「キョウブリ」から見る一考察

羽咋市の獅子舞演目のなかで最も多いのが「キョウブリ（京振り）」である。在地型の能登獅子系の集落に共通して非常に多



く、羽咋市に接する志賀町・中能登町・宝達志水町にも広く分布する。次には、これらの点をふまえ、「キョウブリ」からみた獅子舞の関係性について考えてみたい。この演目の特徴として、

一、羽咋市では、能登獅子系の集落の約八割で共通性が高く、その分布が市内全域に及ぶ。

二、能登では、羽咋市および羽咋郡(志賀町、宝達志水町)に多く、中能登町にはわずかに見られるが顕著ではなく、七尾市には、ほとんど分布が見られない。

三、越中(氷見)獅子にも共通する演目名であり、その関連性を考察可能。

が挙げられる。

前述のとおり、「キョウブリ」は羽咋市の獅子舞演目において、圧倒的に多い演目である。羽咋の能登獅子系は八つのグループに分ける事ができる程多様であるにもかかわらず、「キョウブリ」は、羽咋市の能登獅子系の約八割の地区で伝承されている。

る。これに続いて共通性の高い「サツサイ」や「ホウダツ」は、約四割程であるので、「キョウブリ」は、唯一市内全域に共通する演目として特徴的である。さらに、ハグループにバランスよく伝承されている点も見逃せない。能登地方には、現在四市五町があるが、昭和六一年発行の『石川県の獅子舞調査報告書』を参照すると、「キョウブリ」は、羽咋市を始め、宝達志水町、志賀町に特に多いことがわかった。

キョウブリは、輪島市にもみられるが、これは幕末から明治の初めに、氷見市論田・熊無地区の獅子舞を習った輪島市門前町・安代原を中心に周囲へ広まったもので、いわゆる越中(氷見)獅子系のキョウブリである。ただし、門前町・剣地の獅子舞は、富来町(現志賀町)、または漁師の出稼ぎ先から習ったとされており、能登獅子系のキョウブリの可能性が高く、剣地の南隣の志賀町(旧富来町)・大福寺では、七尾市(旧田鶴浜町)・大津から獅子舞を習ったとされており、能登獅子系のキョウブリが伝わっている。したがって、能登獅子系のキョウブリの北限は、輪島市(旧門前町)の剣地または、志賀町(旧富来町)・大福寺となると考えられる。

子系のキョウブリの北限は、輪島市(旧門前町)の剣地または、志賀町(旧富来町)・大福寺となると考えられる。

キョウブリが、七尾市や穴水町に少ないのは、七尾市の能登島の集落から獅子舞を習った地区が多いためではないだろうか。能登島では、獅子舞の演目にキョウブリがないことが特徴で、ひとつの伝承圏があるように考えている。また、奥能登の能登町、珠洲市には、獅子舞そのものが少ないが、キョウブリの演目もほとんど見られない。

中能登町では、キョウブリが伝承されているのは全体の二割弱程で伝承する地区は少ない。これは、輪島市の例と同様に後年に、氷見市から習い導入した越中獅子系のキョウブリがほとんどである。

志賀町では、約五〇地区でキョウブリが見られ、非常に多い。しかし、上棚や今市は、氷見市懸札や余川から習った獅子舞で、これも越中獅子系のキョウブリであり、実際に氷見市にみられるキョウブリに酷似している。

宝達志水町では、合併前の旧志雄町エリアで、能登獅子系と越中獅子系のキョウブリ

リが混在している。旧押水町エリアでは、能登獅子系の子供のサッサイ獅子にキョウブリがみられる。

これらの点から、能登地方における「キョウブリ」は、羽咋郡市（羽咋市、宝達志水町、志賀町）の特に能登獅子系と呼ばれる地区に集中すると同時に広く分布する演目であり、氷見から伝承した越中獅子系のキョウブリも混在して、さらに数が多く複雑な分布傾向を見せている。

では、「能登獅子系のキョウブリ」と「越中獅子系のキョウブリ」の違いは何であらうか。それぞれの特徴を演舞や囃子から検討すると、天狗の動き・所作や囃子の笛のメロディーに類似性が高いことが指摘できる。そうすると、能登獅子系のキョウブリは、氷見から習ったものではないかとする説が考えられるが、あえて私は「キョウブリ」という演目が氷見から能登（羽咋）に伝わったとする説とは逆の能登（羽咋）から氷見に伝わった説を検討する必要があるのではないかと考える。その考えに至った理由は、

一、氷見で聞き取りをすると、「獅子舞は能登から習った」と答える人が多い。

二、越中獅子系のキョウブリは、別名「十二町（ジンチヨ）の獅子舞」とも呼ばれており、実際に氷見市では、十二町から習ったとする地区が多く、越中獅子系のキョウブリは、氷見市十二町から広まった可能性が高い。

三、キョウブリが、氷見から能登（羽咋）へ伝わったとした場合、羽咋の能登獅子系でキョウブリだけが約八割もの地区に受け入れられ、広がったとは考えにくい。なぜなら、氷見から導入したのであれば、他の演目も合わせて伝わっていないとおかしいし、能登獅子系の地区の演目名は氷見ほど統一制がなくバラバラで、そうした傾向が見られない。キョウブリだけが、氷見から導入され、羽咋市の八割の集落に分布するだろうか。

私は、個人的に氷見の獅子舞を研究するようになって二〇年程になる。春秋の祭礼

時期になれば、毎週のように氷見へ通い、これまでに氷見市の一二七組の獅子舞を実際見てきた。それだけ氷見の獅子舞には魅力があるわけだが、今回はあえて演目「キョウブリ」に絞って、能登獅子系と越中獅子系の関係性について考察してみたいと思う。氷見市では、現在約一〇〇の獅子舞が行われていると言われるが、平成八年頃は約一二〇、昭和五八年頃は約一四〇あったというから、近年減少しているのが分かる。

時代によって、集落の合併や独立があったので一概には言えないが、最盛期には一七〇近くの獅子舞があったのではないかと考えている。氷見市立博物館発行の『氷見の獅子舞』舞う獅子舞・舞わない獅子舞』によると、昭和五八年の演目調査では一五五地区のうち一三九地区から回答があり、キョウブリがあるとした地区は九七地区。同種異称で実際には同じ演舞内容の「十二町の獅子舞」とよばれるキョウブリが二九地区にあるとされた。「キョウブリ」および「十二町の獅子舞」の両方の演目がある地区もあり、キョウブリのことを、いわゆる「ナガ（ヲ）フリ」を指したり、

「キョウフル」、「キョウブリクスシ」としてキョウブリを指したりする地区もあって、正確な数字ではないが、私個人の調べでは氷見市の約九割の地区にキョウブリが共有され、浸透しているように思う。

よく氷見の獅子舞を見ていると「ジンチヨの獅子舞何で舞わいた〜、太鼓とチャンチクリンと笛で舞わいた〜」と周りの人々が声をあげて囃す。この「ジンチヨの獅子舞」が「キョウブリ」であり、氷見市の中心部の市街地周辺地区では、「キョウブリ」＝「十二町の獅子舞」とまで言われるほど浸透しているのであり、キョウブリが十二町の獅子舞演目の代表・代名詞であるとも考えられる。私見では、おそらく氷見市窪下地区がその呼び名の発祥ではないかと考えているが、窪下が十二町から習ったのは、このキョウブリだけだったとも考えられる。氷見市街地では、十二町と窪から獅子舞を習ったとする地区が多く、氷見市全体を見ても十二町から直接習った、あるいは違う地区から習っている、元をたどっていくと十二町に至るといいう地区が多い。

氷見市の獅子舞演目をみると、基本演目とされる四演目の「ヤツブシ（ギオンブリ）」「ヒトアシ」「フタアシ」「バン（イガエシ）」は、どの地区にもあり非常に共通性が高い。続いて、「キョウブリ」や「カイチュウブリ」「ヨッサキ」「七五三」「ヨ（イ）ソブリ」等、氷見市全域約一七〇ある獅子舞のほとんどで、演目のラインナップが非常に似通っており、統一性が高いことに驚く。

このような現象は、先ほども触れた十二町の獅子舞が市内各地に伝わったことに加え、非常に短い期間で急速に広まり、共有された現象を表しているのではないかと考えている。一方で羽咋市では、集落単位で演目がキョウブリ以外はバラバラで独自性が高いともいえる状況で、氷見市のように同じ演目を一体的に共有しているという傾向は見られず、一度に広まり共有されたというのではなく、集落単位で個別に伝承を続けてきたと考えるのが適切である。要するに、氷見獅子では横軸の面的な演目のつながりや共通性が見られる一方で、能登獅子では、集

落単位の個々の縦軸の伝承が顕著であるといえるのである。

以上を踏まえると、先ほどの仮説「キョウブリは、氷見から能登（羽咋）へ伝わった説」は考えにくい。羽咋の能登獅子系の集落では、キョウブリの共通性が非常に一方で、氷見獅子の基本四演目が全く見られないからである。したがって、逆の「キョウブリは、能登（羽咋）から氷見に伝わった説」を考えると、江戸後期もしくは末期に、能登のキョウブリが氷見市十二町に伝わり、氷見市各地に一体的に広まっていくなかで、明治以降になって、氷見のキョウブリとして、越中（氷見）獅子を新たに導入した羽咋市神子原や太田などで舞われるようになったのではないかと考えることができるのではないだろうか。

羽咋の能登獅子系の演目は、ここまでに何度も述べてきたように集落単位で非常にバラエティがあり、むしろバラバラともいえる。しかし、そのなかでも、九割の地区で共通する唯一の演目である「キョウブリ」を、“能登の代表的な演目”として、互いの交流のなかで導入したのが氷見市十二町

なのではないだろうか。そこから越中獅子のキョウブリとして氷見市内に広く伝わっていたからこそ、キョウブリのことを「十二町の獅子舞」とまで言われるほどに浸透したのではないだろうか。そして、明治時代に入って、氷見市の論田・熊無地区を経由して、羽咋市の中山間集落の神子原などに逆輸入的に導入されていったのではないだろうか。

第六章 おわりに

ここまで見てきたように、羽咋市の獅子舞文化は、羽咋市外と接する外部の市町からの六つの往来（方面）との行き来、さらに市内の能登獅子系八グループの集落同士の交流・行き来のなかで、これらが複雑に入り組み、混ざり合ったことによって多様化し、それが集落単位で長く伝承されてきたために多様性かつ閉鎖的ともいえるほど個別の演目を構成するに至ったと考えられる。近世後期から末期の当初は、おそらく在地型の能登獅子系一色であったところへ、明治に入ってから金沢からの料理人が加賀

獅子を伝え、氷見から越中獅子が入ってきた。後者の越中（氷見）獅子をみると論田・熊無系（羽咋市神子原など中山間地期）と触坂系（羽咋市太田町）があつて、これに加賀獅子を含めれば、羽咋市全体で一グループにも及ぶ。今後の演目名（同種異称等）の精査等によつては、さらに変動・増加する可能性も高い。

今回は、獅子舞調査研究の成果としてあえてグループ分けを試みたが、本来獅子舞は、その集落、町会で永い年月をかけて、独自の形に変化（進化とも言える）しているので、それぞれが独立した“オンリーワン”なのである。

この多様化の背景として、羽咋の位置が、加賀、能登、越中を結節する位置にあり、獅子舞文化においても交差点であると言うことが挙げられよう。平成二四年に氷見市立博物館が発行した『氷見の獅子舞』舞う獅子舞・舞わない獅子舞』によると、「従来、氷見の獅子舞は能登から伝わったとされていましたが、近年の調査によると、隣接する石川県七尾市や羽咋市、鹿島郡では氷見から獅子舞を習ったという地区

が沢山あります。」と記されている。氷見市で最も古い獅子舞道具とされる嘉永元年（一八四八）の獅子頭を保存する十二町坂津の聞き取り結果をみると、「獅子舞をどこから習った？」の項目に「加賀や能登か？」と記されており、さらに十二町とともに氷見市街地の獅子舞に大きな影響を与えたと思われる窪下でも「七尾の杜氏」から習ったとの回答があつたとしている。昭和五八年の同様の調査でも、氷見市寺飯久保や島尾、藪田、他数地区で能登から習ったとの回答があつたとしている。

私は、二〇年程前から毎年氷見市十二町の祭りを見学しているが、昨年（平成三〇年）改めて十二町の方々にお聞きしたところ、「能登から習った」という回答がやはり根強い。一方で、羽咋市や宝達志水町、中能登町、七尾市で聞き取りをすると、「獅子舞は氷見から習った」あるいは「富山から習った」とする話が多い。しかし、「氷見のどこ？」、「富山のどこ？」と聞いても、明確に回答される地区はほとんどいない。

個人的には、以前から、氷見の人々が言

う「能登から（或いは加賀）から習った」と、能登の人々が言う「氷見（或いは富山）から習った」は、両方正しいと考えている。それは、行ったり来たりの時代・時期が違うからであろうと思う。仮に江戸後期の一八世紀（一七〇〇年代）から獅子舞が存在したとして、現在までの三〇〇年以上の永い年月のなかで、一七〇〇年代はA↓Bでも、一八〇〇年代ではB↓A、さらに一九〇〇年代ではA↓Bというように、三〇〇年という年月を平面ばかりでなく、縦軸・横軸で整理し、立体にも捉えなければいけないであろう。これを紐解いていくことは、非常に複雑な作業であって、江戸時代の後期から末期、明治大正期の近代、そして戦後の現代における人々の往来を考察していく歴史的考察そのものを検証していく作業でもある。

でも志賀町二所宮に享保一八年（一七三三）の銘の入った鉦が残るとされているし、宝達志水町新宮にも文政元年（一八一八）、安政四年（一八五七）の銘の入った鉦が残っていることから、羽咋市とその周辺では一七〇〇年代には、何らかの形で獅子舞が行われていたと考えられよう。

羽咋市内で能登獅子系と言われてきた地区でも、演目によっては越中（氷見）獅子系のものが混在していることも確認できた。これは、個別に越中獅子の演目を習い導入しているということを示している。こうした現象は、人の、地域の長い交流の歴史のなかで、相互に起こりうることであり、能登から越中へ、越中から能登へ、演目を習い導入した歴史もありうるということも見えてきたと思う。羽咋市内の集落間の交流をみて、X時代はA集落（町会）はB集落とは仲が良く交流があったが、何十年後のY時代ではC集落と交流があるといった変化が加わり、そこへ縁組や仕事（商売）による行き来も加わって、獅子舞文化はまさしく人の動き・交流を象徴する文化と言える。芸能や文化は、人の移動と共に

伝えられるのである。

今後も、地区ごとの演目のより詳細な精査や、地区に残る古文書や道具の銘を洗い直し、近隣市町村とも連携していくことで、羽咋市をはじめ能登地域に伝わる獅子舞の歴史やルーツを解明していく事に挑戦していきたい。この作業は、能登の各地区、氷見市との人と集落の繋がり、そして獅子舞がもつ魅力や価値の再発見となるであろう。私達は、地域の先輩方が遺してくださった獅子舞という財産を守りながら、これからも調査・研究し、継承につなげていくよう歩みが続けていきたいと思う。

参考文献一覧

- 『石川県の獅子舞・獅子舞緊急調査報告書』 石川県教育委員会（一九八六）
- 『志雄町史』 石川県志雄町役場（一九七四）
- 『鹿島町史・通史民俗編』 石川県鹿島町役場（一九八五）
- 『羽咋物語三』 羽咋市商工会（一九九三）
- 『羽咋のれきし』 羽咋市教育委員会（一九八七）
- 『獅子頭』 石川県立歴史博物館（一九九八）
- 『志雄町杉野屋』 金沢大学文学部文化人類学研究室（二〇〇三）
- 『とりや曳山』 石川県鳥屋町（一九九二）
- 『富山県の獅子舞』 富山県教育委員会（一九七九）
- 『氷見市史六・資料編四民俗、神社・寺院』 氷見市（二〇〇〇）
- 『氷見の祭りと獅子舞』 郷土読本第六集 氷見市教育委員会（一九八四）
- 『特別展 氷見の獅子頭展』 解説図録氷見市立博物館（一九八四）
- 『氷見の獅子舞・舞う獅子舞・舞わない獅子舞』 氷見市立博物館（二〇一二）
- 『氷見の手仕事・職人の手業と用の美』 氷見市立博物館（二〇一一）
- 『富山県歴史の五街道』 塩照夫著（一九九二）

あとがき

平成二十七年、当委員会の発足から四年。お陰様で調査報告書の製作まで漕ぎ着けることができました。突然獅子舞の調査取材を始め、各地の祭に出向いた我々でありましたが、徐々に皆様に受け入れていただき、多くの情報を享受できました。ここに篤く御礼申し上げます。

各ザイシヨに伝わる多様な獅子舞。調査を進めていく中で、地域毎に似たものがあつたり、逆に全く異色なものがあつたりと興味深い事例がたくさん出てきました。また、伝来を紐解くと昔からの人々の交流や物の流通の風景が見えてきます。様々な視点から獅子舞が教えてくれることに我々が感じた驚きや興奮を本書から感じていただきますと幸いです。

さて、獅子舞を通して生まれる人の和は、どのザイシヨも変わりないものです。地域内の世代を越えた繋がりができますし、地域から離れて住む人も祭のために里帰りをします。人口減少等、深刻な問題を抱える現在、獅子舞の伝承も危機を迎えています。今が踏ん張り時ではないでしょうか。我々も微力ながらこの事業を通して羽咋を活性化させる一助になりたいと考え活動をしてまいりました。歴史を支えてきたものの一つである獅子舞が、今後も各地で継承され羽咋が発展することを切に祈ります。

最後に、本事業を進めるにあたりお世話になりました皆様、特に写真提供を快く引き受けて下さった渋谷利雄氏、野村恒氏、上田敏樹氏、羽咋市歴史民俗資料館に深く御礼申し上げますとともに、関わったすべてのザイシヨの皆様改めて感謝申し上げます。

平成三十一年三月三十一日

はくい獅子舞保存活性化実行委員会 会長 宮谷敬哉

『羽咋市獅子舞調査報告書』

平成三十一年三月三十一日 発行

編集・発行 はくい獅子舞保存活性化実行委員会

